斎宮跡発掘資料選Ⅱ

平成 22 年 3 月

斎 宮 歴 史 博 物 館

「斎宮跡出土品」重要文化財指定記念
斎宮跡史跡指定30周年記念
斎宮歴史博物館開館20周年記念

斎宮跡発掘資料選Ⅱ

平成 22 年 3 月

斎 宮 歴 史 博 物 館

巻　頭　言

くれ竹のよよのみやこと聞くからに
君は千とせのうたがひもなし

これは、『大和物語』に記された伊勢勅使の藤原兼輔が斎王柔子内親王の着任をことほいだ歌とされています。斎宮とは永劫につづく祝福された地であり、斎王の長寿とともに、斎宮の末永い繁栄への願いが歌われています。

古代・中世の斎宮は、その後の歴史の大きな波の中にひとたびは消え去っていきますが、先人たちの顕彰と、昭和45年から始った発掘調査により、その壮麗な姿はふたたび私たちの目の前に現れてまいりました。そして、昨年は斎宮跡の国史跡指定30周年、斎宮歴史博物館開館20周年の大きな節目を迎えることができました。

その節目の年に、これまでの40年にも及ぶ発掘調査により出土した貴重な資料のうち2,661点もが、わが国の歴史の中で稀有な価値をもつ斎宮の姿を表すものとして、国の重要文化財指定を受けました。かつての斎宮の栄光ある姿が、少しずつですが、ふたたび蘇りつつあります。

本書は、斎宮の姿や歴史的価値をつまびらかにしてきた発掘調査の成果と歩みを、重要文化財となった出土資料などを通して、多くの皆さまにも知っていただこうと作成しました。斎宮の歴史的価値やすばらしさを、本書により少しでも感じとっていただければ幸いです。

最後になりましたが、今回重要文化財の指定にご尽力いただいた文化庁、並びに斎宮跡の保護や活用の面で、ご尽力・ご支援を賜っております地元明和町の皆さま、発掘調査や史跡整備事業にご助言をいただいております斎宮跡調査研究指導委員の皆さまに対し、改めて感謝の意を表したいと思います。

平成22年３月

斎宮歴史博物館
館長　瀧　上　昭　憲

目　　次

原色図版……図版１

白黒図版……図版13

Ⅰ　重要文化財「斎宮跡出土品」のあらまし…… 1

Ⅱ　斎宮跡発掘調査40年のあゆみ …… 3

Ⅲ　掲載遺物各説…… 8

Ⅳ　図版掲載資料一覧表……23

Ⅴ　史跡斎宮跡発掘調査一覧……25

例　　言

1．本書は、史跡斎宮跡の出土資料の一部が、平成21年７月10日に国の重要文化財への指定が官報告示されたことを機に、平成元年に刊行した「斎宮跡発掘資料選」の続編として、重要文化財指定物件を中心に紹介するものである。

2．本書に写真を掲載する資料は、平成元年度以降に発見されたものを中心とするが、重要文化財指定の内容を紹介するために、以前掲載されたものも一部含む。

3．実測図の縮尺については、必要箇所にスケールを表示した。

4．遺構表示記号は次のとおりである。

ＳＡ：柵・塀　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＤ：溝　ＳＥ：井戸　ＳＦ：道路

ＳＨ：竪穴住居・竪穴建物　ＳＫ：土坑　ＳＸ：墓・地鎮・不明遺構

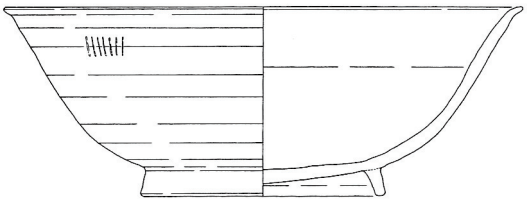
5．本書の編集、執筆には斎宮歴史博物館の倉田直純・大川勝宏・新名強・角正芳浩・筒井正明・山中由紀子があたり、西村秋子・杉原泰子・八木光代・水木夏美・大橋由紀・山本達也がこれを補佐した。また、掲載写真は一部をのぞき高田健司氏に撮影依頼した。

1　緑釉陶器陰刻花文香炉蓋（130次）

２　緑釉陶器把手付瓶（98次）

３　緑釉陶器唾壺（105・109次）

４　緑釉陶器大鉢片（8-9・59・116-2次）



緑釉陶器大鉢復元実測図（１：６）

５　緑釉陶器陰刻花文陶片（史跡内各所）

６　緑釉陶器香炉片とレプリカ（109次）

７　緑釉単彩陶器片・緑釉陶器片（史跡内各所）

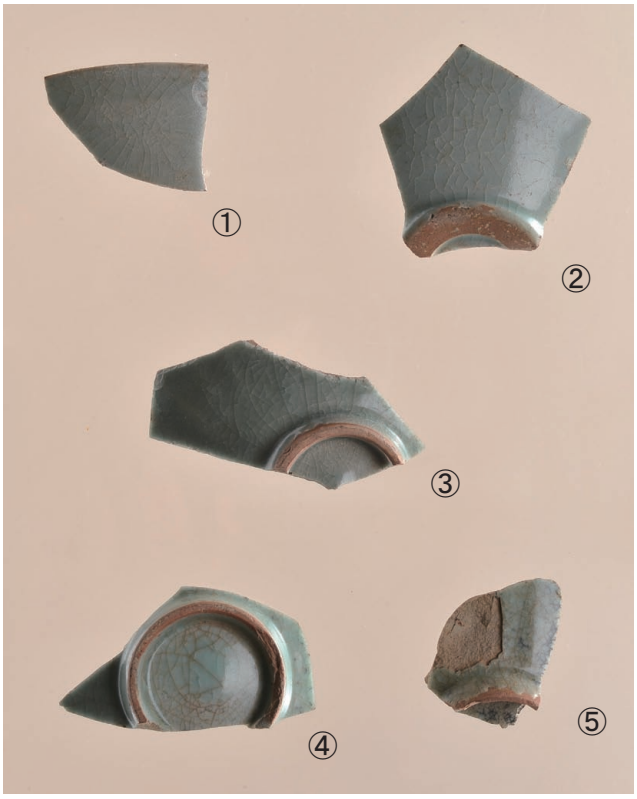
８　緑釉陶器
陰刻花文陶片（9-1次）

９　緑釉陶器枕（114次）

10　緑釉陶器陰刻花文陶片（44次）

11　ＳＫ2650出土遺物（編年基準資料　斎宮跡第Ⅱ期第3段階　44次）

12 初期貿易陶磁片（上：白磁　下：越州窯系青磁　史跡内各所）



13 初期高麗青磁片（史跡内各所）

14 越州窯系青磁輪花椀片とレプリカ（42-1次）

15 羊形硯（91次）

16 鳥形硯（90次）

17 土　馬　（史跡内各所）

18 小型模造品（史跡内各所）

19 京都系土師器（史跡内各所）

20 須恵器壺Ｇ（66・143次）

21 須恵器大型瑞（139次）

22 墨書土器「目代」（83次）　　左詳部

23 墨書土器「少允殿」（83次）

24 墨書土器「伊」（83次）

25 墨書土器「大炊」（86次）

26 墨書土器「豊兆」（86次）

27 墨書土器「四条」（29次）

28 刻書土器「殿」（29次）

29 墨書土器「應」（130次）

30 墨書土器「萬鏡」（89-2次）

31 鳥墨画土器（86次）

32 鳥墨画土器（114次）

33 ひらがな墨書土器（44次）

34 ひらがな墨書土器（124次）

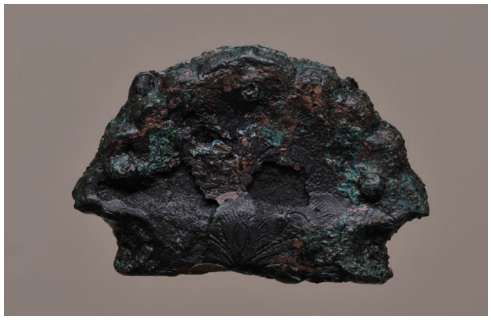
35 ひらがな墨書土器（史跡内各所）

36 金銅製帯金具と石帯（史跡内各所）

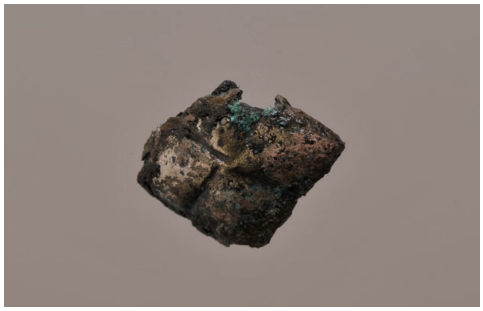
37 金銅製馬具（137次）

38 金銅製馬具（5次）

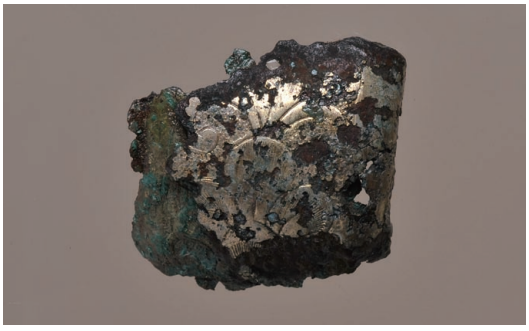
39 金銅製Ｌ字形金具（108次）



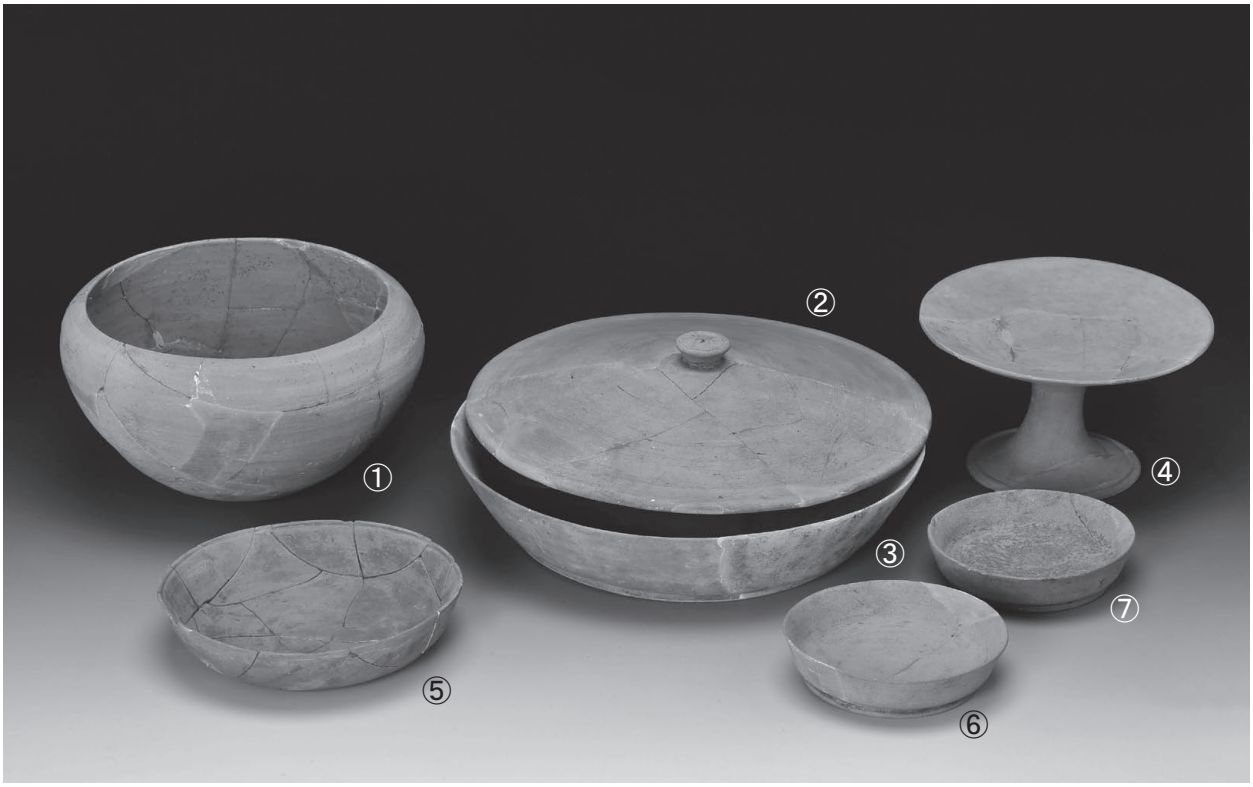
40 用途不明金銅製品（31-4次）



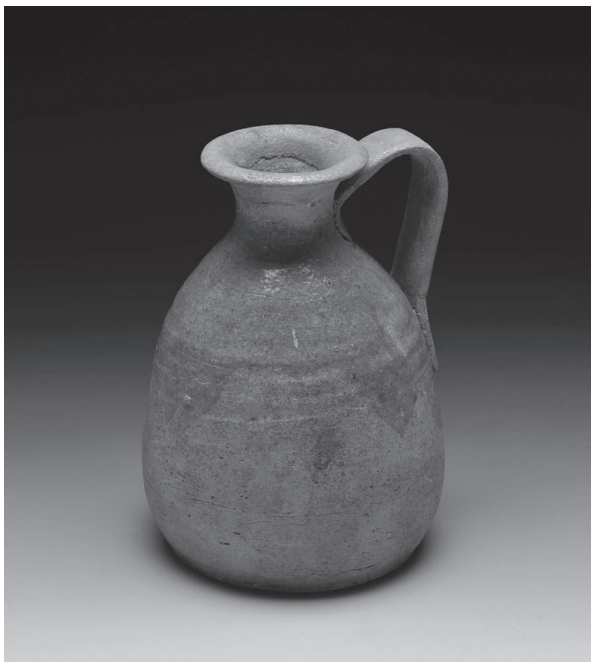
41 金銅製釦（133次）



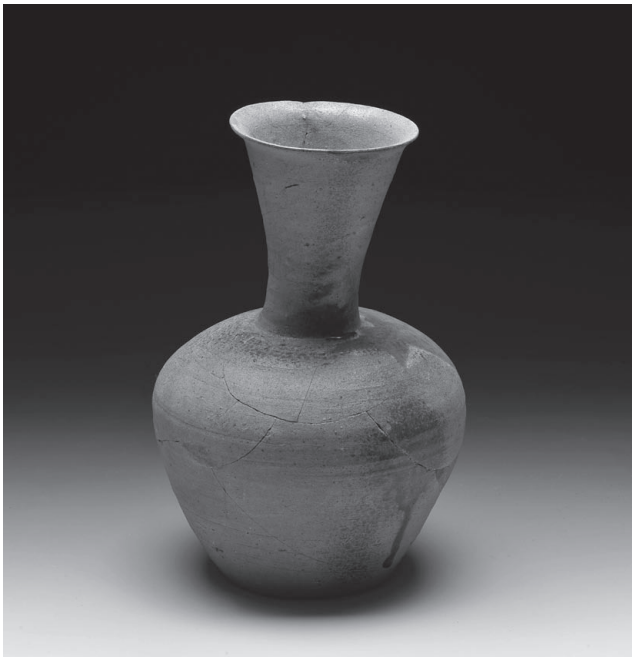
42 金銅製毛彫金具（114次）



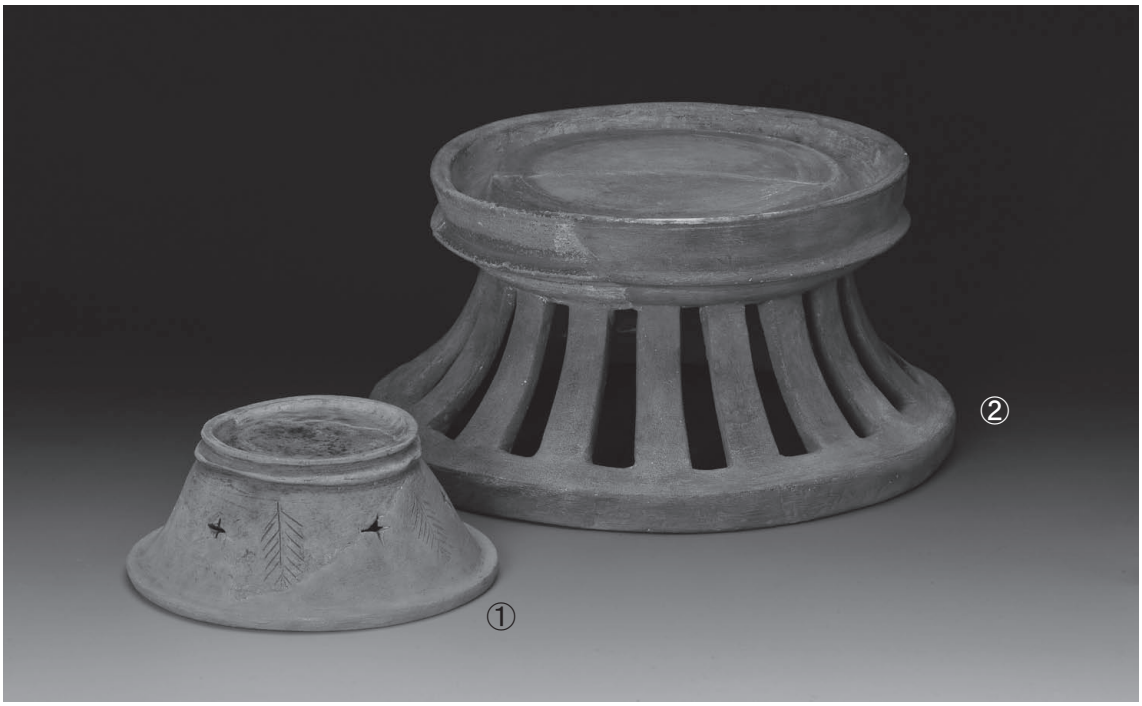
43 奈良時代中期(斎宮跡第Ⅰ期第3段階)の須恵器（史跡内各所）



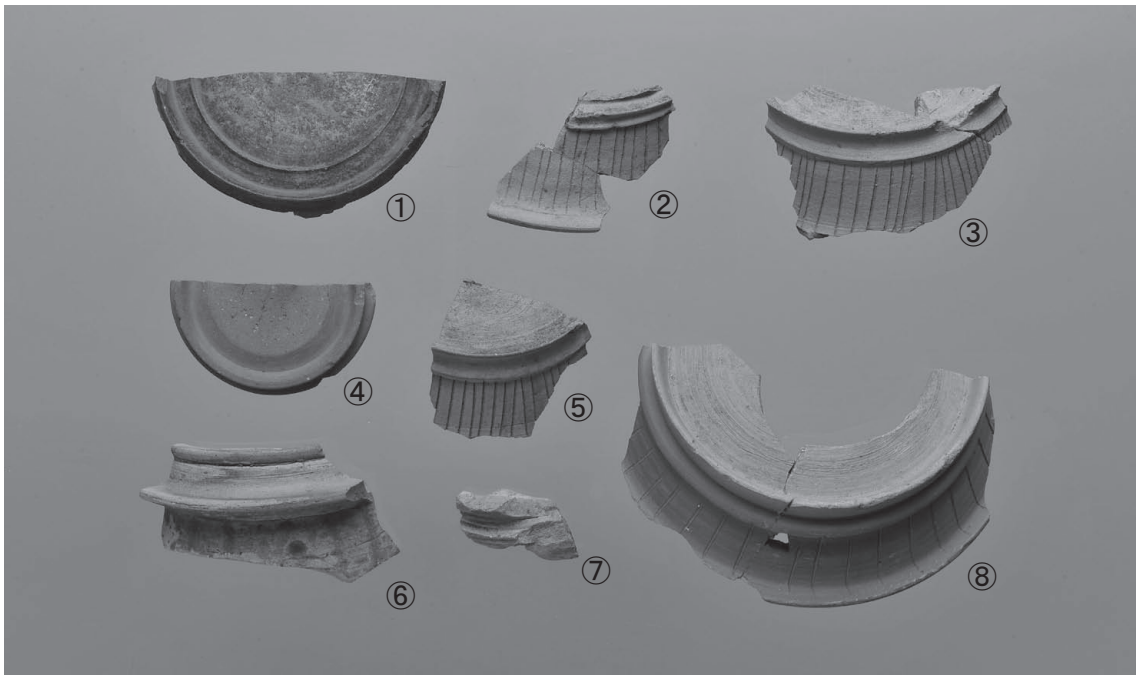
44 灰釉陶器把手付瓶（90次）



45 須恵器長頸壺（98次）

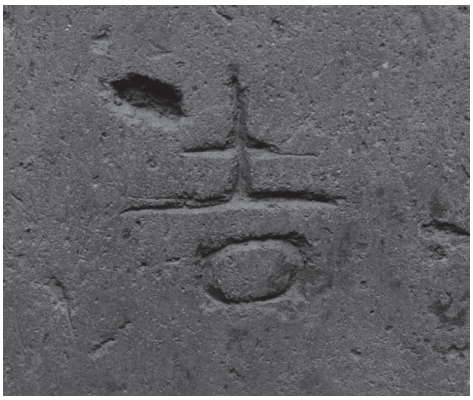


46 円面硯（89-2・107次）

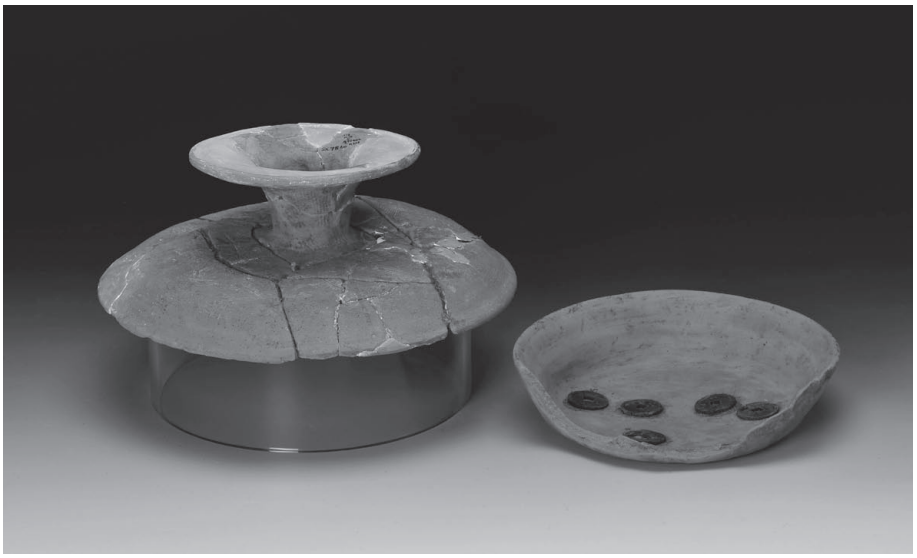


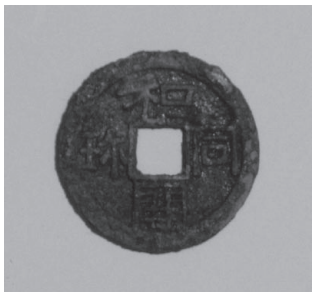
47 円面硯片（史跡内各所）

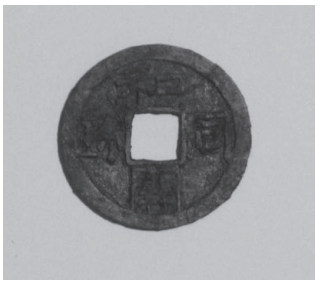
48 「吉」刻字猿面硯（99次）



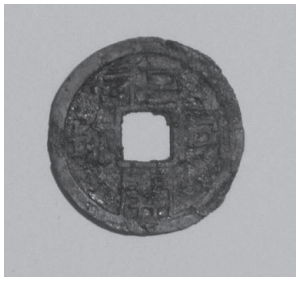
左詳部



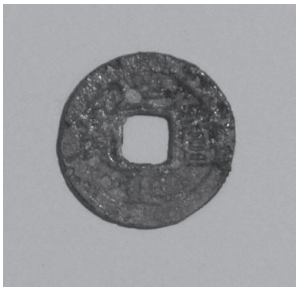


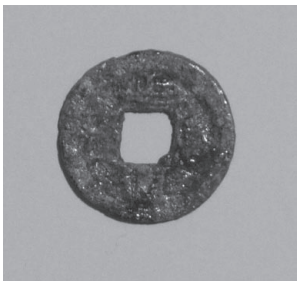


49 地鎮遺構SX7860出土遺物（118次）



50 地鎮遺構SX8310出土遺物（130次）





51 地鎮遺構SX6666出土遺物（95次）

52 墨書土器「衆」(136次)

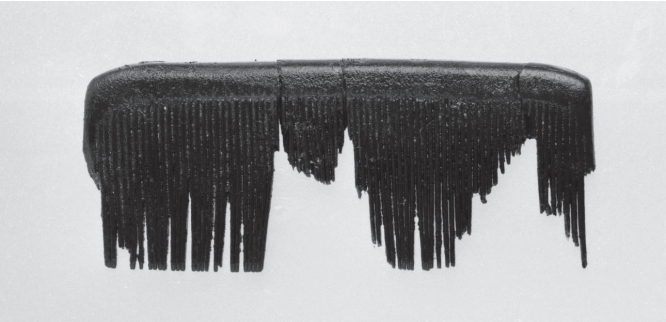
53 墨書土器「寺」(130次)

54 墨書土器「福福・・・」(83次)

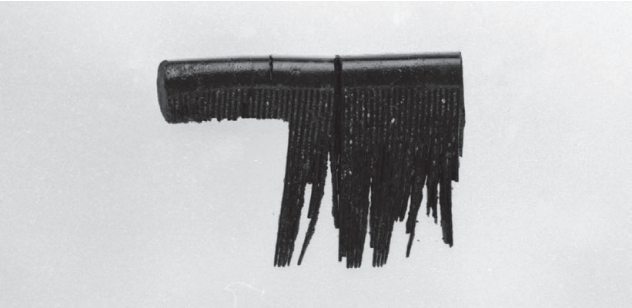
55 墨書土器「奉」(86次)

56 墨書土器「井」(111-3次)

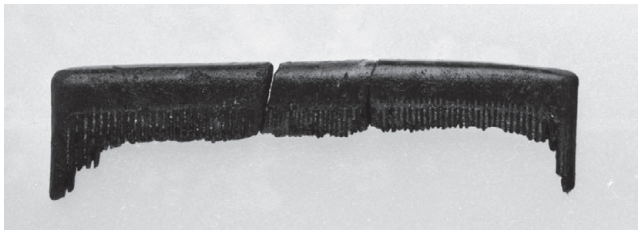
57 墨書土器「椋人」(82-1次)



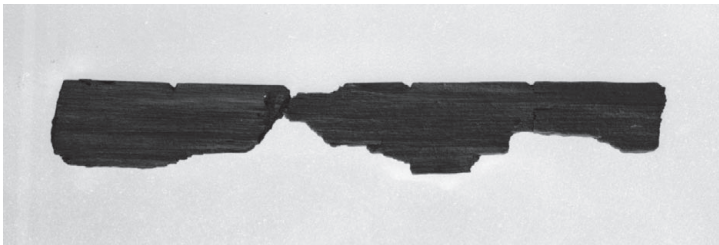
58 木製品　横櫛（90次）



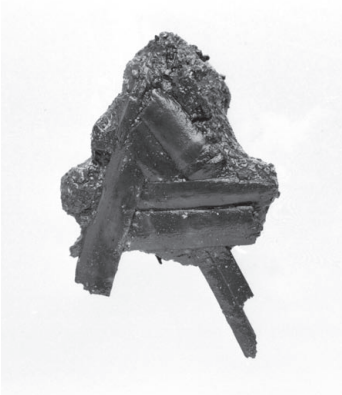
59 木製品　横櫛（90次）



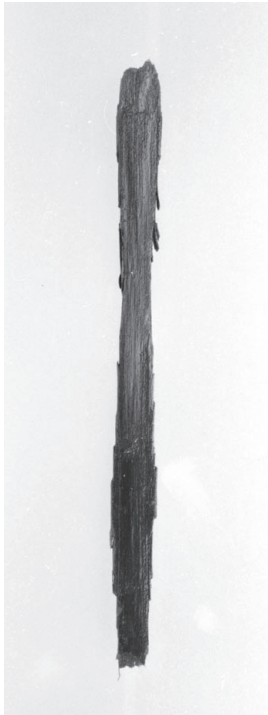
60 木製品　横櫛（90次）



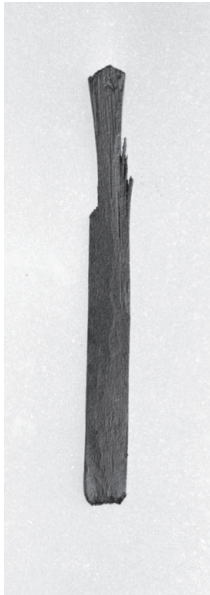
63 用途不明木製品（90次）



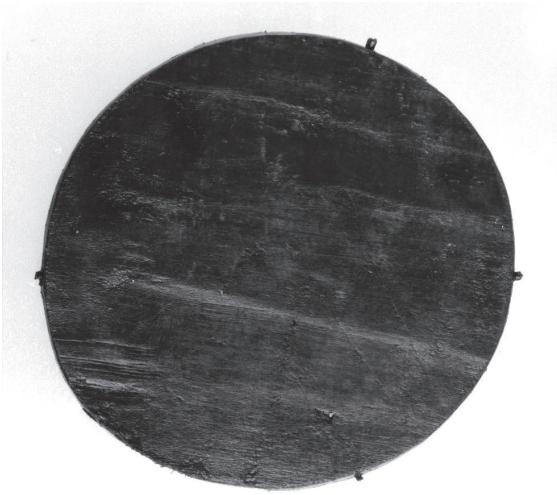
65 籠状製品（90次）



61 木製品　斎串（90次）



62 木製品　斎串（90次）



64 木製品　曲物底板（90次）

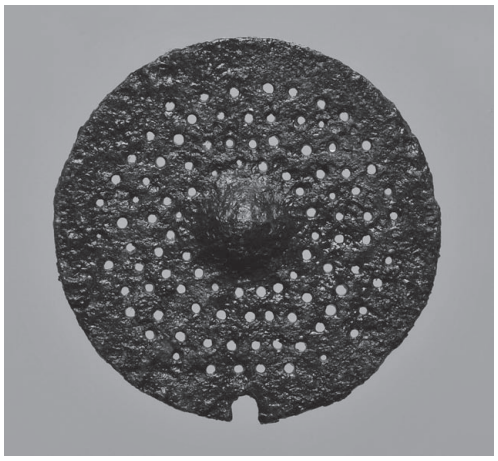
66 土製サイコロ（114次）

67 鉄製品　錘（109次）

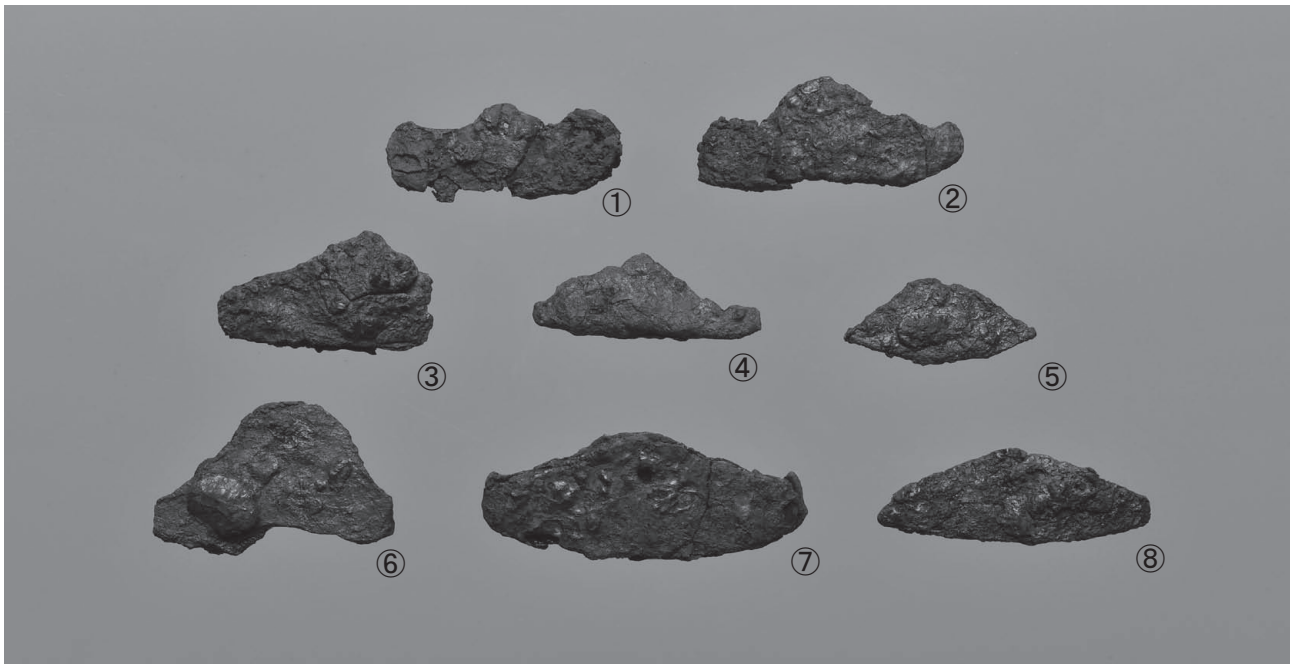
68 鉄製品　雁股鏃（108次）

69 青銅製品　刀拵（8-7次）

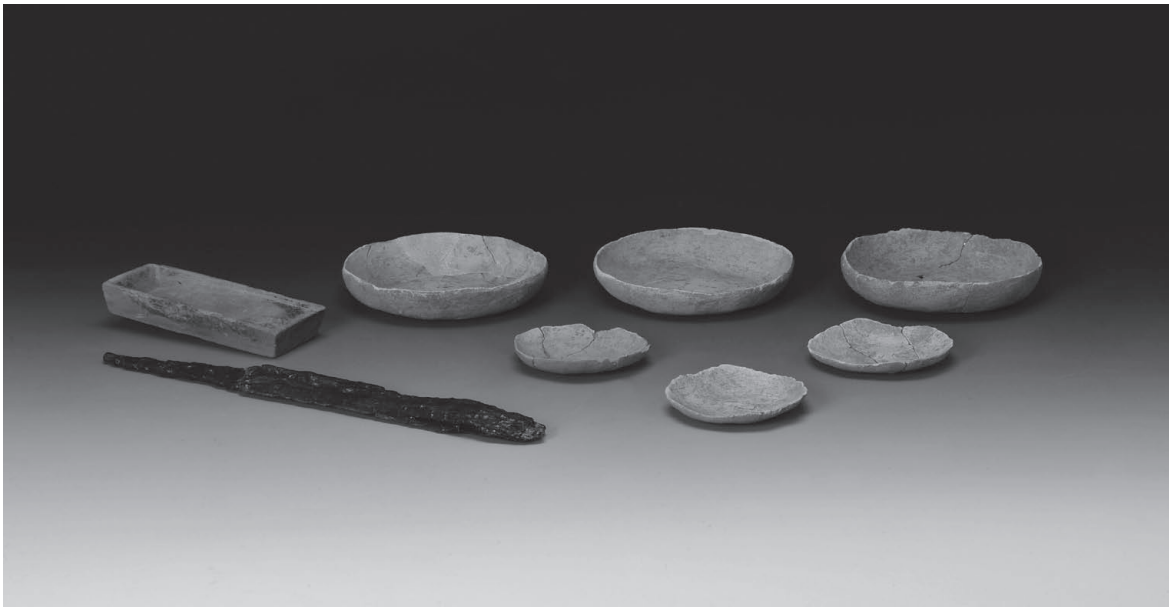
70 青銅製品　熨斗（20次）



71 用途不明鉄製品（19次）



72 鉄製品　火打金（史跡内各所）



73 中世墓SX6533出土遺物（93次）

74 中世墓SX6537出土遺物（93次）

75 中世墓SX6975出土遺物（101次）

Ⅰ．重要文化財「斎宮跡出土品」のあらまし

平成21年は、昭和45年に斎宮跡の発掘調査がはじまって40年目の記念の年にあたる。また、この３月には、国史跡指定から30周年を迎えたところである。そして同じく７月10日に、斎宮跡からの出土品のうち2,661点が国の重要文化財（考古資料）の指定を受けた。文化審議会にかけられた議案書によれば、まず､斎宮跡の長年の発掘調査により集積してきた成果にもとずく考古学的資料・知見により､｢幻の宮｣と呼ばれて実態が明らかでなかった斎宮の解明が進められてきたことが評価されている。

こうして重要文化財に指定された物件は2,661点にも及ぶが、これも40年の斎宮跡の発掘調査の出土品総体からみれば、ごく一部でしかない。指定にあたって今後の管理や活用を念頭に置いて点数を絞り込んでいった結果だが、その作業にあたって、①制度の上で、飛鳥時代から南北朝時代までの約660年間にも及ぶ斎宮の長い歴史を通観できる。②斎宮の宮殿・官衙としての性格を明らかに示せる内容を持つ。③学術的な価値を示すだけでなく、展示などにより実際に活用できる内容を持つ。④発掘調査は今後も継続していくため、将来の追加指定の可能性を念頭に置く。といった点に留意して、対象となる資料の選定を文化庁の指導のもとに行った。①と④の関係では、まだ発掘調査による実態の解明が進んでいない鎌倉時代以降の資料については、今回は基本的に対象から外し、将来の調査の進展を待つこととしたほか、選定作業上の区切りとして、指定のための諸作業を始めた段階で発掘調査の概要報告が刊行され、調査成果の公開が行われていた、平成17年度までの出土資料を対象とすることとした。

2,661点の内容を見てみると、その大部分が「磁器・陶器・土器・土製品」の2,582点である。これは台地の上に立地し、有機質あるいは金属質の資料が遺存しにくい、斎宮の立地的な条件によるところが大きい。また、斎王の退下にともない、斎王家に属する財産は都に持ち帰られるという、斎宮ならでは

重要文化財「斎宮跡出土品」の構成内訳

１．磁器・陶器・土器・土製品			2,582点
	土師器	652点	製塩土器	3点
	黒色土器	31点	墨書土器	379点
	ロクロ土師器	53点	刻書・印刻土器	50点
	須恵器・陶器	145点	硯	174点
	灰釉陶器	95点	土馬	32点
	緑釉陶器	562点	小型模造品	173点
	磁器（中国産）	214点	その他土製品	7点
	磁器（朝鮮産）	12点		
２．木製品			18点
３．石製品			17点
	石製銙帯	16点	白黒玉石	1箱分
４．金属製品			41点
	銅鏡	3点	銅製品	4点
	金銅製品	8点	鉄製品	4点
	銭貨	21点	鉛製品	1点
附．馬歯			３点
			計　2,661点

の条件にもよるだろう。ただしその中においても、緑釉陶器の出土量の多さは、全国の遺跡の中でも特筆すべきものであり、今回は出土した緑釉陶器の中から、約１/３以上遺存して形態が判断できること、壺類や香炉など比較的特殊な形状のもの562点を抽出した。さらに緑釉陶器については、長岡京期から平安京の初期にかけてみられる、「緑釉単彩陶器」（初期緑釉陶器）と呼ばれる古いタイプの緑釉陶器が出土することも注目される。

磁器類では、９～11世紀頃の初期貿易陶磁と呼ばれるものが多数出土している。この中には唐～五代の邢窯系とみられる白磁や越州窯系青磁、北宋代の青白磁が含まれる。初期高麗青磁の出土も注目されよう。このように、緑釉陶器や初期貿易陶磁などといった、都城以外ではみられない高級陶磁器類が大量に出土している点は、宮殿としての斎宮の性格を如実に示すものであろう。

斎宮において、最も多量に出土し、出土資料の基盤をなすものに土師器類や須恵器類などがある。これらを選択するのにあたり、斎宮歴史博物館が呈示している土器編年案の基準資料のうち、『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ』に掲載されているものを中心に抽出した。これにより飛鳥時代から平安時代までの出土資料の変遷を通観できるようにした。

こうした什器類以外のものに目を向けると、硯はすべて陶硯で、大型の蹄脚硯や円面硯、羊形硯や鳥形硯などの形象硯があり、これらは単に官衙としての性格を示すものだけでなく、都に直結した高度な文物でもある。

木簡が遺存しにくい高燥地に立地する斎宮にとって、墨書・刻書された文字は、その実態をうかがうためにも貴重な資料である。これらの文字には、「寮□」「水司」「膳」「大炊」「殿」「應」や「少允殿」「目代」「蔵長」のような斎宮寮の官司名・官職名に関わる文字、「豊兆」「福」「大」「吉」「万」「萬鏡」などの吉祥文字とみられるもの、「椋人」「鴨」など人名に関わるとみられるもの、数字などがある。ひらがなを墨書した土器が、平安時代の中心部の内院周辺で多数発見されていることも、斎宮の大きな特色である。また、文字以外にも人物の顔、鳥や鹿、草花文を描いたものや、幾何学的模様を描いたものもあり、目的は分からないが、斎宮での多彩な精神活動の一端を示すものであろう。

斎宮の祭祀の場としての側面を示す遺物としては、井戸から出土した木製の横櫛・斎串、斎宮の各所から出土した土馬、小型模造品や、地鎮とみられる遺構から出土した和同開珎や延喜通寶を伴う埋納品がある。

石製品は大部分が官人の腰帯に装着された石製銙帯（石帯）である。小穴から出土した総数1,899個（指定物件としては１点として扱う）になる直径１㎝弱の白黒の玉石も一括して指定された。また、五芒星や「＃」などを墨書・線刻した土器も、なんらかの祭祀にかかわる資料と考えられる。

銭貨以外の金属製品には唐鏡などの奈良～平安時代の銅鏡片や、調度の装飾に用いられたとみられる金銅製の金具がある一方、金銅製の締金具や鉄製轡といった馬具や、雁股鏃などの武具、鉄製の紡錘車などがあり、多様な性格をあらわしている。

このように、今回重要文化財に指定された「斎宮跡出土品」2,661点は、40年に及ぶ発掘調査で出土した資料全体のごく一部にすぎないが、出土品全体が持つ歴史的・学術的価値を代表するものとなっている。この「斎宮跡出土品」を俯瞰することで、飛鳥時代から平安時代までの斎宮の長い歴史や、当時の役人たちの実像、あるいは中央の都城と遜色ない文物が持ち込まれていたことが分かるとともに、「女性の都」ともいえる斎宮跡の特性が垣間見えてくるものである。今回の指定品の中には、これまで一般に公開されていないもの、また選定作業の過程で新たに発見されたものも多数含まれている。重要文化財「斎宮跡出土品」が本当の意味で国民の宝となっていくためには、これからの保存管理や修復、または公開や学術的な調査など、斎宮歴史博物館に課せられた責任はさらに重くなったといえるだろう。

Ⅱ．斎宮跡発掘調査40年のあゆみ

斎宮跡の発掘調査は、その端緒となった昭和45年の古里（ふるさと）遺跡の試掘調査を第１次とし、以後、範囲確認調査、計画的学術調査、現状変更等に伴う調査など、様々な調査目的に応じた調査が積み重ねられ、平成21年度の調査で節目の40年目に入った。調査次数は、平成20年度末時点で第161次に達し、累積発掘調査面積は216,149㎡にも及ぶ。しかし、これはまだ史跡全体の15.7％に過ぎず、それほど斎宮跡は、全国に類を見ない広大な遺跡なのである。

さて、発掘調査40年間を振り返ってみる時、４つの大きな節目を経て、今日ある斎宮像が解明されてきたと考えられる。一つ目は、考古学上の斎宮跡発見から史跡指定に至るまで、二つ目は、三重県斎宮跡調査事務所開所から斎宮歴史博物館開館まで、三つ目は斎宮歴史博物館開館から斎宮跡歴史ロマン広場完成まで、四つ目は初期斎宮跡解明調査から現在に至るまでである。ここでは、これらを四つの画期と捉え、発掘調査の成果、保存、活用等についてたどってみたい。

１）第Ⅰ期（昭和45年度～53年度）～斎宮跡の発見から史跡指定まで～

斎宮跡の発掘調査の始まりは、高度経済成長期の最中、ちょうど大阪万博が開催された昭和45年に遡る。当時、祓川（はらいがわ）を望む台地縁辺部において、民間会社による大型宅地造成計画が持ち上がり、昭和45年６月から明和町教育委員会が調査主体となって古里遺跡の試掘調査を実施したところ、各試掘坑で奈良時代や中世の遺構・遺物が確認された。そのため、翌昭和46年には、県教育委員会が調査主体となり、調査経費の原因者負担による古里遺跡Ａ地区（1,200㎡）・Ｂ地区（5,000㎡）の面的な事前調査が実施された。その結果、数多くの掘立柱（ほったてばしら）建物をはじめ、井戸、土坑（どこう）、並走する奈良時代と鎌倉時代の大溝のほか、遺物では蹄脚硯や朱彩大型土馬などが発見され、古里遺跡が単なる中世村落遺跡ではなく、にわかに斎宮との関連が注目されるに至った。そこで昭和47年から49年にかけて国庫補助金を導入して、さらに古里遺跡の調査を進めるとともに、昭和48年度から３ヵ年計画で幅４ｍのトレンチ調査による斎宮跡範囲確認調査も県道南藤原・竹川線以東で併行して実施された。調査は、古里遺跡５地区で12,650㎡、範囲確認調査は総延長3,200ｍ、調査面積約11,000㎡に及んだ。

古里遺跡Ｂ地区の調査（第３次）

こうした範囲確認調査の結果、各所から大型掘立柱建物や緑釉陶器が見つかり、斎宮跡が古里遺跡も含む想像を超える広大なものであったことが次第に明らかとなり、西は斎王が禊（みそぎ）を行った祓川、東は通称役場道東のエンマ川、南は参宮街道沿いの町並みを含む水田との境、北は鎌倉時代の大溝までのおよそ東西２㎞、南北700ｍに及ぶ137haの範囲に遺跡が所在するものと認識されるに至った。

範囲確認調査Ｍトレンチ（第８-８次）

このように斎宮跡の実態が明らかとなり、その重要性が高まるにつれ、保存をめぐる動きも活発化した。当初、三重県文化財を守る会（略称、三文守）を中心に進められた古里遺跡を守る運動は、昭和47年、三文守を母体として結成された「古里遺跡を守る連絡協議会」に受け継がれ、同年に結成された「明和町郷土文化を守る会」等と共に発掘現地見学会、

著名な学者による講演会の開催、講演記録冊子「保存の声」の刊行、国・県への保存請願など様々な活動が展開された。こうした一連の保存活動は、発掘調査の進展とともに、やがて本丸である斎宮跡の保存に向けられていくこととなる。昭和51年12月には、「斎王宮址、保存・整備の請願書」が県議会で採択され、翌年６月には、国会の衆議院文教委員会でも採択された。また、考古学・古代史関係学会などが続々と斎王宮跡の保存に関する要望を決議し、行政への働きかけが盛んに行われた。

一方、県・町教育委員会が主体となり、国史跡指定に向けた地元地権者への説明・働きかけも進められた。、指定に対する不安と誤解を解くための手段の一つとして、昭和51年11月、文化庁文化財監査官（当時）であった坪井清足氏に「斎王宮の価値と保存の意義」というテーマで、昭和52年３月には、文化庁主任文化財調査官（当時）の北村文治氏に「斎王宮跡の保存と指定」というテーマで講演いただいたほか、地元説明懇談会は百数十回を超えるものとなった。こうした経過を経て、関係する地権者約500世帯あまりのうち約70％の指定同意が得られ、地権者の「理解と納得」による信頼関係の上に、ようやく明和町から史跡指定申請書が提出され、昭和54年３月27日付けの官報告示で、斎宮跡が国史跡に指定された。

２）第Ⅱ期（昭和54年度～63年度）

～三重県斎宮跡調査事務所開所から斎宮歴史博物館開館まで～

県は、史跡指定後の県と明和町との役割分担を明確にするため、昭和53年12月22日付けで、県と町との間で覚書を交わし、県は計画的な発掘調査を行い、出土品の保存展示施設の整備、遺構の復元等を行っていくこととなった。また、この年、県教育委員会による面的な計画発掘調査が、はじめて下園（しもぞの）・御館（みたち）・柳原の３地区で開始された。そして、昭和54年４月、斎王の森から東へ約200ｍの下園地区に、発掘調査、保存啓発の基地として小さな展示施設を併設した県立の斎宮跡調査事務所が開設され、初代竹林日出夫所長以下５名の調査組織が発足するとともに、斎宮跡の調査研究・保護について指導・助言を得る「斎宮跡調査指導委員会」が設置された。指導委員は、福山敏男（建築史学）、服部貞蔵（歴史学）、久徳高文（文学）、坪井清足（考古学）、門脇禎二（古代史学）、楢崎彰一（陶磁器学）、渡邊　寛（古代史学）等、時の学会を代表する錚々たる学者が集められた。このように斎宮跡の学術的な解明への責任と期待や斎宮跡の歴史的価値は発足時から全国レベルであった。

斎宮跡調査事務所

当初発掘調査は、昭和54年度に明和町が策定した「史跡斎宮跡保存計画書」に謳われた土地利用区分のうち、準公有化（C）地区とされた中町集落北側の地区については、３カ年をかけて見直すこととなっていたため、当該地区を対象に重点的な調査が行われた。当時は、土曜日も調査を実施し、直接雇用していた発掘作業員も40名を越えていたので年間の調査面積が10,000㎡を越えることもあった。この時期の調査成果として特筆されることは、史跡中央部から東部にかけて、幅約12ｍの道路に囲まれた一辺が約120ｍ四方の碁盤目状の区画（方格地割（ほうかくちわり））が東西５列、南北４列にわたり存在することが明らかになったことである。光仁（こうにん）朝から桓武（かんむ）朝にかけて整備されたと考えられるこの整然とした都市的空間は、長岡京や平安京の造営にかかる設計思想とも関わり、共通する歴史的背景のもとで出現したものと認識されるに至った。これは後に木葉山（こばやま）地区で八脚門（はっきゃくもん）が確認されたことにより、最大で東西７列の規模を誇る壮大なものであった。こうした奈良時代後期から平安時代を通しての斎宮寮の全体イメージが早い段階で把握できたことは、その後の発掘調査の進展に大きく寄与した。

一方、出土遺物では、史跡西部の中垣内地区で実施した第30次調査で、県内２例目となる三彩陶器片が確認されたほか、『延喜斎宮式』などの文献に記載されている斎宮寮13司の存在を裏付ける墨書土器「寮□」、「水司鴨□」、「殿司」などの発見、奈良時代前半の須恵器の供給元を特定する根拠となった「美濃」刻印陶器の発見などがあり、考古資料と文献とを融合させた研究が進んだ。また、史跡中央部から東部において、多量の土師器、灰釉陶器、緑釉陶器などを一括で廃棄したと思われる土坑（SK1455、SK1730、SK2650など）や井戸（SE2000、SE4050など）が相次いで確認されたことにより、これら一括出土遺物をもとに昭和60年３月、最初の土器編年基準となる「斎宮の土師器」が提示された。この基準は、以後平成13年３月に刊行の正報告書で「斎宮跡の土器編年」が示されるまで、遺構・遺物の時期を決める根拠となった。

SK2650遺物出土状況（第44次）

最初の史跡整備は、昭和57年度と61年度に「斎王の森」周辺で、掘立柱建物、井戸、道路などの遺構表示を中心とした整備がモデル的に実施され、昭和62年度には古代官道沿いの塚山地区でも同様の整備が行われた。

３）第Ⅲ期（平成元年度～13年度）
～斎宮歴史博物館開館から斎宮跡歴史ロマン広場完成まで～

斎宮歴史博物館

史跡指定から10年目の節目にあたる平成元年10月、斎宮跡の調査・保存・活用の拠点として斎宮歴史博物館が史跡西部の古里地区に開館した。当初、史跡内にこうした施設を建設することには異論もあったが、サイトミュージアムとして史跡との一体的な活用を最優先に考え、盛土・ベタ基礎工法により遺構を完全に保存するという前提で決着をみた。この開館を契機に組織の充実が図られるとともに、従来からの発掘調査に加えて、展示、各種講座、普及公開活動にも力が注がれるようになった。

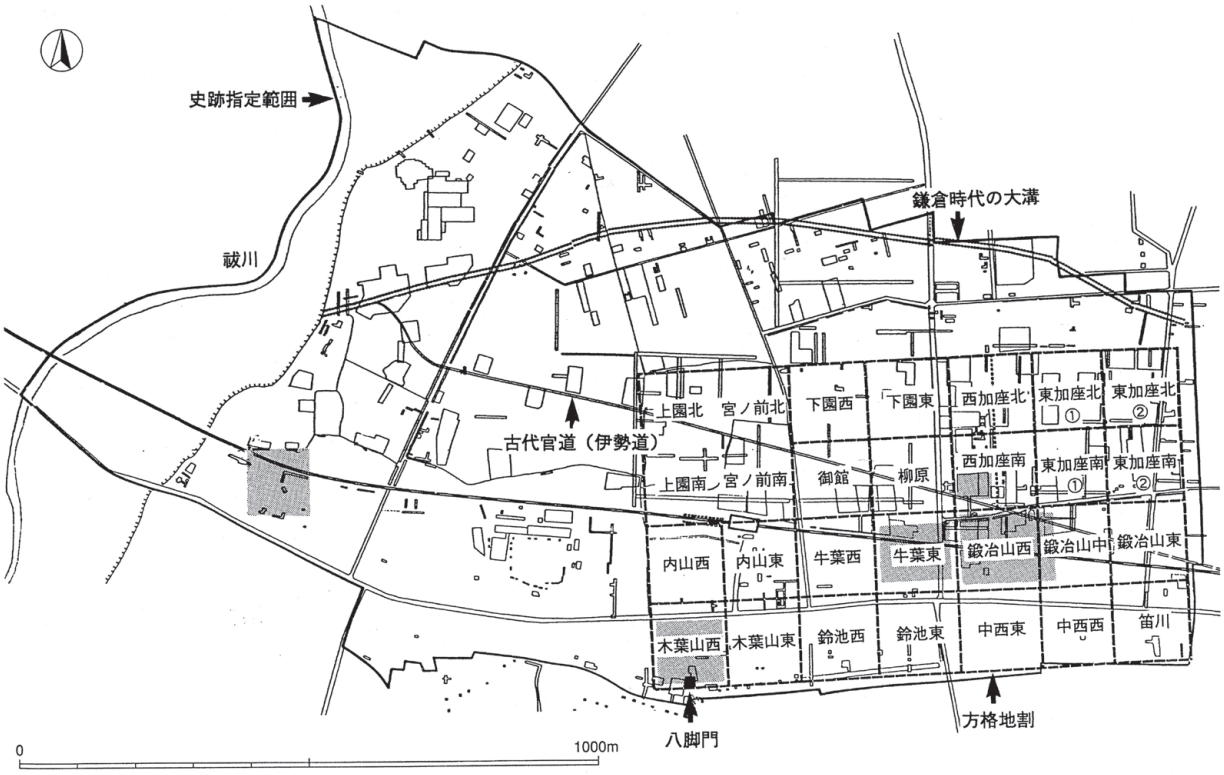
内院区画最大級の掘立柱建物（第119次）

この時期の発掘調査は、斎王の居所とされる内院地区の実態解明が最重点課題であったため、平成２年度から12年度にかけて史跡東部の鍛冶山西区画・西加座区画・東加座区画・牛葉東区画等で精力的な調査が行われた。その結果、鍛冶山西区画で二重の大型掘立柱塀（柱間10尺等間）に囲まれた内郭・外郭を擁する内院区画（寝殿推定箇所）の北縁部や、その西隣の現在竹神社敷地となっている牛葉東区画（出居殿推定箇所）の一部及びそれらの変遷が明らかとなった。また西加座地区では、逆Ｌ字形の建物配置をとる「神殿」やその北側で16棟の倉庫群から成る「寮庫」なども特定された。このほか、20数次に及ぶ調査の積み重ねにより、史跡中央部を斜めに貫通する古代官道「伊勢道」の考古学的検証や、史跡北部を弧状に迂回する鎌倉時代の大溝の実態解明も進み、斎宮の成立や廃絶を考える上で重要なデータが蓄積された。

１／10史跡全体模型

この期で注目される出土遺物には、「蔵長」、「目代」、「少充殿」といった官職名を記した墨書土器や羊形硯、鳥形硯などがあり、斎宮ならではの重要な資料の発見が相次いだ。

史跡の活用面では、近鉄斎宮駅北部の「遺構の活用・演出ゾーン」において、平成８年度から平成13年度にかけて大型史跡整備事業を実施し、平安文化を体験する体験型学習拠点として「いつきのみや歴史体験館」、「斎宮跡歴史ロマン広場」として１/10史跡全体模型と外周柳並木道等が整備された。

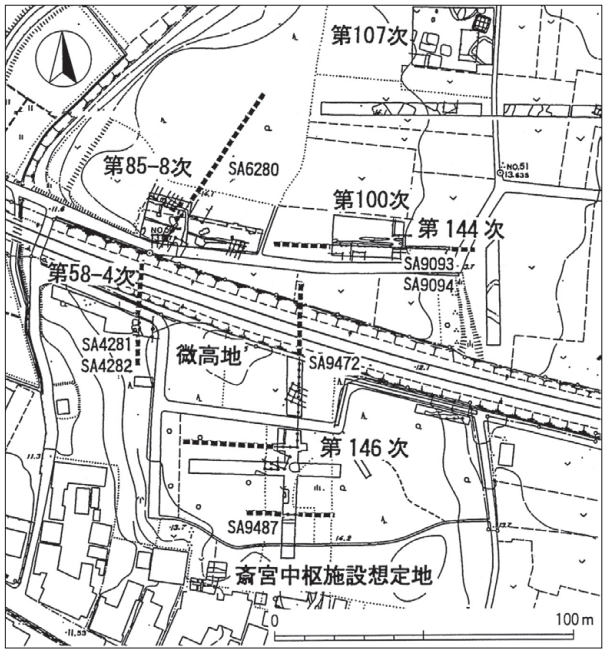


発掘調査で明らかとなった方格地割・古代伊勢道・鎌倉大溝 網目：掘立柱塀の巡る区画（『三重県史 資料編 考古2』より）

４）第Ⅳ期（平成14年度～現在）

この時期の特徴は、バブルの崩壊、「工業社会」から「知識・情報社会」への転換、「ものの豊かさ」から「心の豊かさ」へ、グローバル化、個人主義的価値観の拡大による地域社会の崩壊、地域文化の没個性化など、博物館を取り巻く環境が大きく変化した時代に突入したことである。財政状況は、これまでの右肩上がりから超緊縮財政となり、博物館業務にかかわる予算は減少の一途をたどった。発掘調査事業にかかる予算も史跡指定当時から比べると約１/４にまで落ち込んだ。

こうした中、斎宮跡解明の次なる目標を初期斎宮の所在地ならびにその範囲を確定することに置かれた。そのため、これまで飛鳥・奈良時代の初期斎宮跡地と想定されていた史跡西部の中垣内地区を中心に平成14年度から18年度にかけてトレンチ調査によ



初期斎宮の中枢施設

る範囲確認調査が実施された。その結果、棟方向が正方位と斜方位を示す掘立柱建物群が随所で確認され、重複関係から新しいとされる正方位の建物群の出現は、聖武天皇の娘、井上内親王の斎王卜定（ぼくじょう）に伴う斎宮寮の官制整備に連動した造営ではなかったかという見解も出されている。また近鉄線を挟む最も高所では、掘立柱塀を伴う区画が２時期以上にわたって確認されており、中枢施設との見方が有力視されている。このほか、古代伊勢道から分岐してこの区画に向かって南下する道路遺構も見つかった。したがって初期斎宮は、この道路遺構から台地縁辺部にかけての一帯に存在することがほぼ確定的となった。今後、面的な調査によりその実態が解明されることを期待したい。

初期斎宮の区画施設SA9472（第146次）

柳原区画の中心建物（第152次）

一方、史跡東部において学術調査に基づく本格的な復元整備を望む声が各方面から高まり、これに向けた調査が、平成19年度から３ヵ年をかけて柳原地区を中心に行われている。現在、整理・検討段階ではあるが、当該地区には、内院地区に次ぐ規模の大型掘立柱建物や庇（ひさし）を有する建物が集中する地区として注目されており、とりわけ区画の中心部で200年以上にわたり５回建替えられている四面庇付建物は、全国的にも例がなく、その性格をめぐって寮頭館（りょうとうかん）あるいは客館かと論議中である。今後、これらの成果を活かして史跡整備でどのように表現し、活用していくかが課題となっている。

斎王まつり

以上、発掘調査40年間を振り返って注目された成果を中心に述べてきたが、これらは、地元地権者の理解と協力があってこそのことであり、発掘調査に携わってこられた地元作業員の汗の結晶とも言える。今後、初期斎宮の実態解明、斎王が禊をした祓川を望む水田地帯の解明、斎宮衰退期の解明、とりわけ廃絶まで斎宮の中心部であった現竹神社境内地内の実態解明など多くの課題が残っており、着実に調査を進めたいと思う。

地元では30年前の史跡指定にあたり、相当将来に対する不安もあったと思う。しかし今振り返ってみると、もし優良農地が団地等で開発されていたら、道路ができ、町が賑わう反面、社会問題、環境問題、地域コミュニティーの崩壊などを招いていたであろうが、このように史跡という形で、良好な自然が残されてきたことは良かったと、好意的な意見も多い。

昭和58年に住民主体で始められた斎王まつりは今年で27回目を迎え、今や三重県を代表するまつりとなった。このほか、十五夜観月会、斎宮浪漫まつり、いつきのみや梅まつりなど、地域の歴史的資源を活かしたイベントや、史跡内を案内するガイドボランティアの活動、緑のまちづくり推進委員会を主体とする植栽環境美化活動、史跡斎宮跡・伊勢街道まちづくり会による活動など、発掘調査や史跡整備の進展とともに、住民主体による斎宮跡を核としたまちづくりの取り組みも活発化しつつある。今後も住民・行政が理解と納得という信頼関係のもと、それぞれの立場で力を発揮して、斎宮跡の保存・活用が図られていくことを願ってやまない。

Ⅲ．掲載遺物各説

1）編年基準資料

今回の「斎宮跡出土品」の重要文化財指定にあたり、その骨格を成すものとしたのが、土器類による斎宮跡の編年基準資料である。これは、平成12年度に斎宮歴史博物館が『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ』を刊行の際に、土坑や井戸出土の土器群を、その出土状況や時期的・形式的な一括性を検証し、時期決定の基準となり、斎宮跡の土器類の変遷を示す編年案を構成することができるものとして紹介した資料である。この編年基準資料を眺めることで、斎宮跡での土器類の形態や組み合わせの変化の大枠を知ることができ、斎宮跡の考古学的な研究の基本となる学術的な価値の高い資料ともいえる。

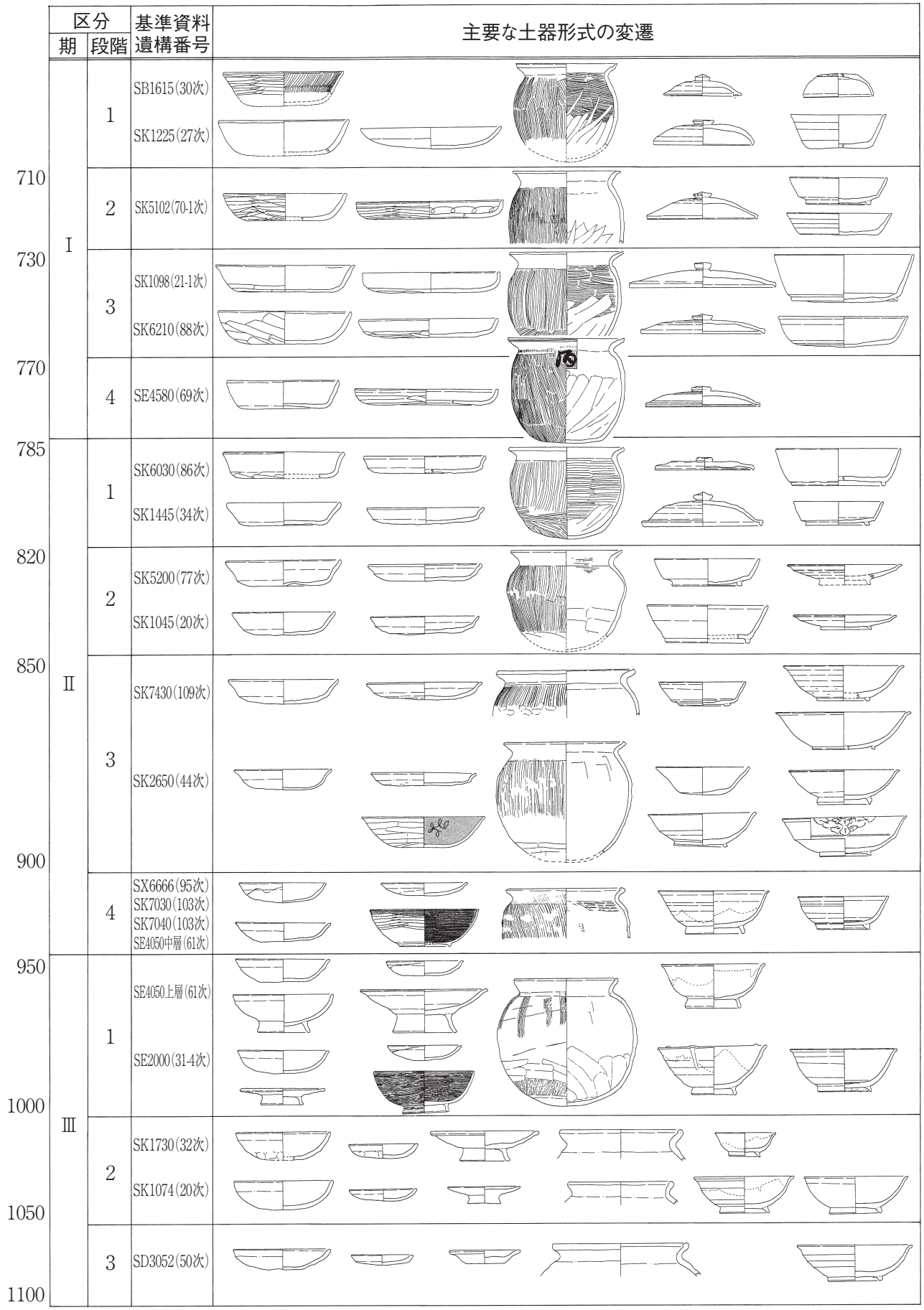
現在、斎宮跡の土器編年は、飛鳥時代後葉から平安時代末までのおよそ500年あまりについて整理されているが、これをさらに３つの画期と11の段階に区分している。

３つの画期のうち第Ⅰ期は飛鳥時代から奈良時代、７世紀後葉から８世紀後葉までに相当する。基準資料とした土器の一括性の高い遺構出土土器と、そこに含まれる斎宮の外部から搬入され編年研究の進んだ東海地方の窯業地域の須恵器類との共伴関係から、第Ⅰ期はさらに４段階に区分している。この第Ⅰ期を通して共通するのは、資料の大部分を占める土師器の杯・皿類の外面の調整に、ヘラミガキやケズリといった手法が使われていることである。その中でも時期が下るにつれてヘラミガキは見られなくなり、ケズリによる調整も底部を中心としたものになる。また、第Ⅰ期第３段階は８世紀中ごろに比定されているが、前段階に比べ美濃須衛窯産の須恵器が多量にみられるようになり、斎宮寮の財政をすべて国庫でまかなうとした『続日本紀』天平二年七月癸亥条の記事との関連性が指摘されている。

第Ⅱ期は平安時代初期から中ごろ、８世紀末から10世紀前半までに相当する。第Ⅰ期同様、須恵器類や灰釉陶器類との共伴関係から、さらに４段階に細分している。土師器杯・皿類の調整手法がナデ調整が中心となり、第Ⅰ期に比べて小型化・薄手化がみられる。おおむね桓武朝から村上朝に当てられるとみられ、斎宮が制度的にも爛熟していく時期であり、土器の様式にもそれがうかがわれる。土師器杯・皿類の小型化、甕類の底部のヘラケズリ調整の一般化とともに、黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器といった新しい器種が加わり、爛熟期の斎宮の土器様式を華やかなものにしている。第Ⅱ期第３段階には緑釉陶器の出土量が増えるとともに、陰刻花文稜椀に代表されるような猿投窯産の優品も多い。基準資料には含まれないが、越州窯系青磁などの初期貿易陶磁や、緑釉単彩陶器（初期緑釉陶器）といった全国的にも稀少な遺物が出土するのもこの時期である。

第Ⅲ期は、杯・皿が明確に分かれていた土師器の形態が崩れ、高台を持つ椀形態の器種が増加する様式上の大きな変化がみられる。緑釉陶器が猿投産から東濃や近江などの量産品に変わるとともに、あらたにロクロ成形されたとみられる土師質の土器が出現し、斎宮への土器類の供給にも変化がうかがわれる。第Ⅲ期も共伴する須恵器・灰釉陶器類から３段階に細分される。土師器杯が徐々に椀形になるとともに、皿は小皿に統一される。甕は球胴化が進み、外面のハケ調整が省略される傾向にあり、口縁の端を内側に折り返す形状になる。黒色土器は内外面を黒化するB類と呼ばれるものが現れる。第Ⅲ期３段階には、東海地方を中心に爆発的に流通する「山茶椀」と呼ばれる無釉の陶器椀が多量に共伴するようになり、全体に土器様式の中世化が進む段階と位置づけられる。

このように、編年基準資料は、単に遺構・遺物の時期決定の物差しであるだけでなく、斎宮の歴史的な変遷も反映するものである。しかし、時期変遷をみるうえで、斎宮跡の土器編年は不十分な点もまだ多い。既に抽出された基準資料の中でも欠落する器種もあり、土器の形式変化からみて、さらに形式と形式の間を埋めていく作業が必要である。特に第Ⅰ期の後半と第Ⅲ期２段階以降から鎌倉時代にかけては、さらに検討する必要性が高い。今後もより精密な斎宮跡土器編年を構築し、斎宮跡の考古学的研究を推進するためにも新たな出土資料の発見と、これまでの資料の見直しによる編年の再構築を進めていかなければならない。



編年基準資料からみた斎宮跡の土器の変遷（実測図は1：6）

２）三彩・緑釉陶器

三彩陶器　奈良時代の斎宮が所在した史跡西部の第30・71次調査の２箇所から出土した。

第30次調査では、史跡西南部の微高地に位置する飛鳥・奈良時代の中心部東側から東北方向に延びる南北道路の東側に位置する竪穴住居・土坑・溝などから細片が４片出土している。３片は同一個体で、表面に緑・白・褐釉が掛けられており、口縁が短く垂直に立ち、球形の体部と高台を持つ短頸壺に復元できる。残りの１片は蓋（ふた）の破片である。また、博物館建設に伴う第71次調査では、奈良時代後期の土坑ＳＫ4750から小壺の底部片が出土した。体部の外面には緑・白・褐釉が残っており、第30次調査で出土した短頸壺の形を小さくしたミニチュアの小壺である。

緑釉陶器　斎宮跡から出土する土器類のうち、緑釉陶器の点数や多様な器形の出土量は、三重県だけではなく、東日本を含めた遺跡の中でも突出する量であり、このことは緑釉陶器が存続した奈良時代末期から11世紀前半にかけての時期が、斎宮が最も整備された全盛期と一致することの表れともいえる。以下、斎宮跡の緑釉陶器について、主な特徴を紹介する。

緑釉単彩陶器　杯・高杯（たかつき）・火舎（かしゃ）・羽釜（はがま）・甑（こしき）など後の時期には見られない器形の一群は、長岡京が造営（784年）される頃から出現した。これらは緑釉単彩陶器と呼ばれ（「初期緑釉陶器」と呼ぶ場合もある）、かつては三重県内での出土例は知られてなかったが、斎宮跡の調査で下記に述べる羽釜・火舎・高杯・杯類等の５点が確認されるようになった。羽釜以外の４点は、すべて史跡東部に造営された方格地割のうち、内院想定地の鍛冶山西区画の北側に位置する西加座南区画からの出土である。当該区画は南北道路によって東西に分けられており、第83・84・86次調査区はこの区画西側に、第140次調査は区画東側に位置する。これらの緑釉単彩陶器の出土状況は、方格地割の中心部に近い場所で出土することから、貴族層など一部の人しか使用することができなかったという、緑釉単彩陶器の性格を現しているものといえる。

羽釜は、昭和50年度の第９－10次調査で既に出土していたが、細片のため羽釜と認識されたのは平成の時代になってからである。鍔（つば）の部分の小片で、史跡東部にある方格地割西北部の上園南（かみぞのみなみ）地区の包含層（ほうがんそう）から出土した。出土場所は、伊勢に向かう古代官道（伊勢道）の南側にあたり、数次にわたる調査で奈良時代後半代の遺構が多く確認されている地域である。

火舎は２点あり、（３）は第140次調査で出土した破片３片から復元したもので、９世紀後半の土坑SK8842に混入していた。もう１点は、第86次調査の平安時代初期の土坑SK6012から出土した底部片で、前者とは別個体である

高杯（１）は、第83・84次調査で出土した杯部と脚部の破片６片から復元したもので、10ｍほどの範囲にある井戸・溝・柱穴・包含層から出土した。また、第83次調査で高杯の出土した井戸からは、口径18cm程度の口縁部の小片が１片出土しており、傾斜した口縁部から杯類の可能性が高いものである。

緑釉陶器の全盛　９世紀前半のものは、主に内院である鍛冶山西区画を中心とした方格地割の中心部から出土しており、その出土数は多くはない。これらは京都産に加えて猿投産のものが少量あり、出土数が少ないことから緑釉単彩陶器同様に一部の人の使用にとどまったのであろう。この後の９世紀後半以降の緑釉陶器は出土する場所が広がっていき、総出土点数は7,000点以上となる。これらの出土破片数の大半は９世紀後半以降のものであり、このことは、斎宮跡内でも緑釉陶器を使用する人々が増えていったことを物語っている。また、その生産地は、京都、猿投、東濃、近江産以外に、近年は愛知県豊橋市二川窯（ふたがわよう）の製品もわずかであるが認識されるようになった。

緑釉陶器の器形は椀・皿類が中心であるが、その他の器形の例として、唾壺（２）は、内院西側の第109次調査の土坑SK7425、把手付瓶（６）は、内院東側の第98次調査から出土するなど、方格地割の中心部に近い場所から出土したものには優品が多い。

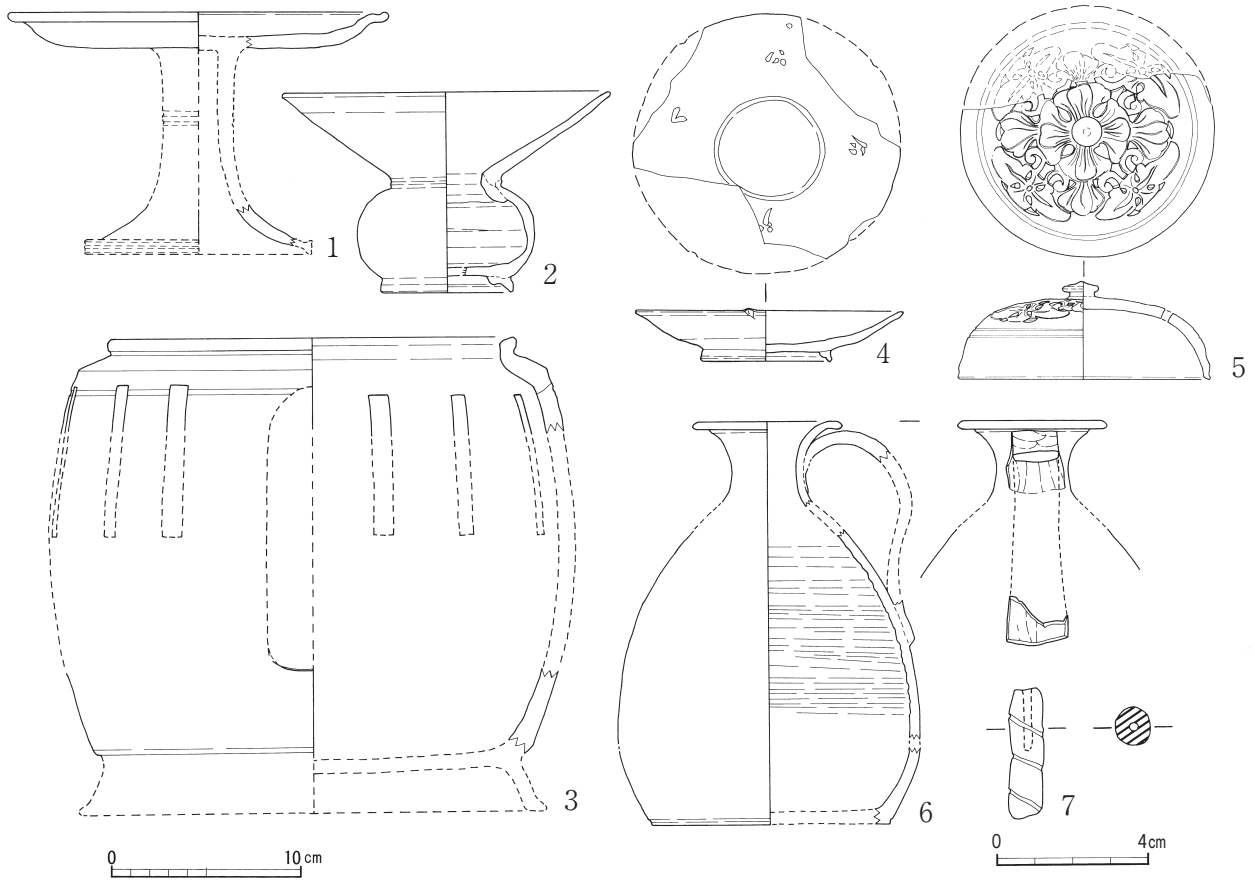
陰刻花文・緑釉緑彩　椀や皿の内面に花の文様をヘラで刻んだ陰刻花文は、200点以上出土している。器の内面中央に蓮華文、口縁部の内側には花びらを半分に割った半裁形の花弁を対面に四ヶ所ほど配置したものがほとんどであり、９世紀前半に出現し10世紀前半には減少していく。

鍛冶山西区画の９世紀後半の基準資料である第44次調査の土坑SK2650からは、体部に稜のつく稜椀や皿の内面に繊細な線で描かれた陰刻花文のほか、色の薄い緑釉を全面に塗り、濃い緑色の釉薬で花や草の文様を描いた緑釉緑彩とも呼ばれる緑釉陶器も出土している。（４）は方格地割西北部の第127次調査で出土した9世紀後半の皿で、内面に草文が4カ所描かれ、高台端部内面に沈線が巡る特徴から愛知県二川窯の製品と考えられる。陰刻花文の施された蓋（５）は、西加座北区画の第130次調査から出土したもので、天井部では花文を残すように透かしが施されている。

このほかの文様には、蝶の文様がある。方格地割東北隅区画の第66次調査で１点しか確認されておらず、三足の脚がついた皿の口縁部内側に蝶の文様が四ヶ所配置されるものである。

陶枕　鍛冶山西区画同様に内院に想定される牛葉東区画では、陶枕の小片が６片出土している。竹神社北側の第114次調査の４片は、９世紀後半代の猿投窯の製品の可能性がある。釉薬の発色の濃淡から２種類に分類できるが、小片のため同一個体の可能性も残る。また、第114次調査東側の第10次調査で出土した２片は、別個体で10世紀以降と時代が下がる大陸からの輸入品である。１点は片面に濃い緑色の釉で、表面には、幅0.1㎝強の楕円に引かれた沈線の内側に、沈線に向かってハケ状工具により羽状文と、その下側に水波文が描かれる。もう１点は明るい深緑色の釉薬で、表面には波状に抉られた窪みが幾重にも重なり、この波状の窪みは型押しによって施文された可能性が高いものである。

不明土製品　西加座南区画で行った第136次調査では、径0.9㎝、残長3.4㎝、胎土は軟質の細長い管状の製品が１点出土している（７）。表面には凹線が螺旋状に巡り、緑釉の痕跡がわずかに残っているが、どのような製品になるのかは不明である。



緑釉陶器実測図（1：4・7は1：2）

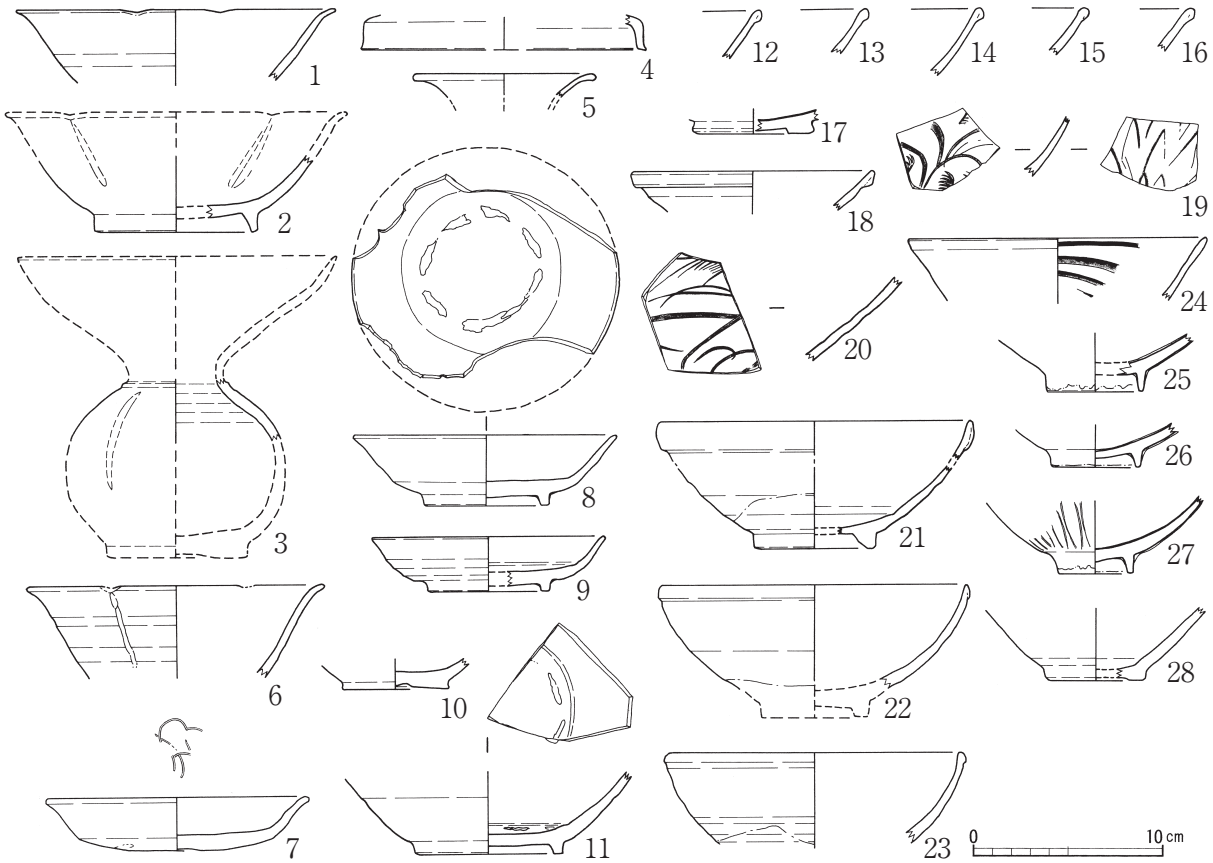
3）初期貿易陶磁

斎宮跡ではこれまであまり紹介されてこなかったが、初期貿易陶磁と定義づけられる11世紀前半代までの輸入陶磁器類が、大宰府や博多などの北部九州や平安京などを除けば、際立った質・量で出土している。

越州窯系青磁では、内院「鍛冶山西区画」と方格地割北西部で、『源氏物語』などで「ひそく(秘色)」と呼ばれたものに匹敵する優品がある(1～3・5)。これらは薄く精良な磁胎や均質な釉薬に特徴づけられ、輪花椀のほか、細頸壺、唾壺のように特殊な器形のものも含む。それに対して、やや粗製のものは、底部の内外に焼成時の目痕が残り、露胎部分も多く、釉薬のムラも目立つ(6～11)。時期的には最も古い資料で斎宮跡土器編年のⅡ－3期、9世紀後半まで遡る。

大宰府での出土陶磁器分類で白磁のⅠ類に分類されるもの（12～17）は、柔和な発色の釉薬、やや軟質な磁胎と玉縁口縁や蛇目高台などに特徴づけられるが、内院でも「牛葉東区画」と、方格地割北西端でのみ出土している。最も古い事例で斎宮編年のⅡ－4期の遺構から出土しており、10世紀前葉までは遡れる。さらに北部九州で11世紀前半代までに位置づけられる白磁椀XI類などに相当するとみられる資料(18・21)や、優美な花文や蓮弁文などを描く北宋代の優品(19・20)も出土している。このように斎宮跡では多彩な初期貿易陶磁をみることができる。

11世紀後半以降になると、貿易陶磁の出土量は大きく増加し、白磁椀Ⅱ類(22・23)を中心に椀Ⅳ類、各種皿類や越州窯系青磁(6・10など)に、北宋系の白磁や青白磁ともいわれる青味がかった発色の椀・皿・合子類が加わる。12～13世紀には同安窯系青磁や、大量の龍泉窯系青磁が加わる。また12世紀頃を中心に、少量だが東日本では稀少な初期高麗青磁の椀類(24～28)が出土しているのも、都城以外の遺跡では大きな特徴といえる。



初期貿易陶磁類実測図（1：4）〔1～11：越州窯系青磁　12～23：白磁　24～28：初期高麗青磁〕

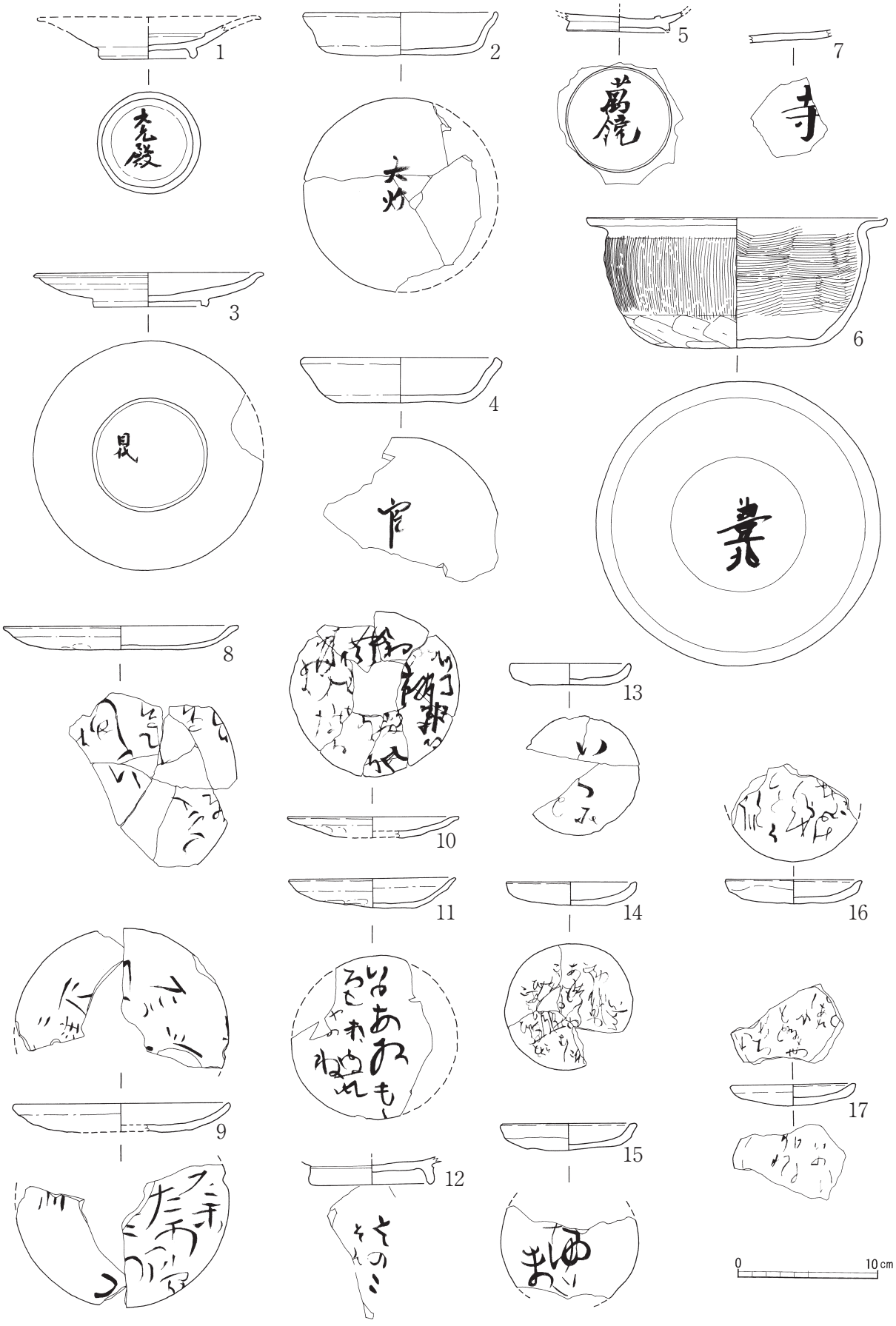
4）墨書土器・刻書土器

斎宮跡では1970年以来40年におよぶ発掘調査にもかかわらず、2009年末の時点で木簡（もっかん）や漆紙文書（うるしがみもんじょ）などの出土はなく、発掘調査による文字資料は、墨書・刻書土器が重要な資料である。これら斎宮跡の墨書・刻書土器の特徴は、第１に、その大半が土師器であること。第２に、漢字は一文字程度の墨書例が多いこと。第３に漢字が墨書される部位は底部外面が多いこと。第４にひらがな墨書が出土することである。大半が土師器という点は、他の官衙遺跡出土の墨書土器が、主に須恵器であることと対照的で、土師器を主に使用する宮殿・官衙である、斎宮の特徴を示すものでもある。このことは、斎宮跡周辺に北野遺跡や国史跡水池（みずいけ）土器製作遺跡など奈良時代中心の土師器焼成（しょうせい）遺構が数多く分布することや、平安時代以降には、神宮に供給する土師器の一大生産地であった「有爾郷（うにごう）」が隣接していたことも関連するのだろう。

さて、墨書･刻書された文字を性格で分類すれば、まず官司や官位に関連するものがある。これらの出土は、『延喜斎宮式』など文献上記録される組織の実在を明らかにした。たとえば斎宮寮の実在を示す「寮□」や官職「少允殿」（１）、斎宮寮十三司や官職に関連する「蔵」「蔵長」「膳」「酒」「水司」「水部」「殿司」「薬」「大炊」（２）「炊」などである。また、「目代」（３）の出土は国司の代理の目代（もくだい）の存在から、斎宮寮頭を伊勢国司が兼務することの事実と、斎宮寮と伊勢国司の連携を示す資料と考えられている。その他、「鞍」「侍」「車」「薗」「騨」「厨」「官」（４）などは、斎宮寮十三司の関連組織や日常業務と関わるものであろう。次に、人名と思われるものに「氏子」や「水司鴨□」「水司鴨三」などがある。「水司鴨□」「水司鴨三」は中央官制において主水司（もひとりのつかさ）にかかわる鴨氏（かもうじ）が斎宮の水司にも関係する資料として注目される。また、「𠀋椋人」「𠀋木□」や「𠀋坂己」などは、他と差別化する意図が明確にみられ、人名を含む可能性もある。その他、吉祥句（きっしょうく）とされる「万」「萬」「萬鏡」（５）「□福」「豊」「豊兆」（６）などや、呪術的な意味を持つと思われる「井」「年平」、刻書のドーマン「＃」、五芒星「☆」などがある。また、『延喜斎宮式』の忌詞に該当する「寺」（７）も確認されている。ところで、漢字の場合は文字を判読できるものの、それが意味するもの（人名・順番・特定の物・動物など）が不明であることが多い。これは書かれる文字数は１文字程度が多いこと、墨書･刻書土器がまとまった量で一括出土する例がないこと、官司名のもの含め、出土位置と明確に関連するものがないなど、土器に墨書・刻書した目的を推測することができないからである。さしあたって、墨書･刻書される部位が底部外面に多いので、該当の土器は保管・整理の際は底部が見える状態で行うとの推測はできる。

さて、斎宮跡の墨書土器の重要な特徴のひとつは、ひらがな墨書土器（８～17）が出土することで、これまで100点以上の出土例がある。文字は細い筆を使用した流麗な筆使いで書かれ、ほとんどは習書や筆ならしと思われるもので、数文字しか判読できない。土器の器種は、主に土師器小皿が多く、墨書の部位は底部外面が多いものの、内面と底部外面付近、内面の墨書などもある。ひらがなが「をんなて」といわれることから、書き手が斎王や近侍（きんじ）の女官とも推測されるが、ひらがなを理由に書き手を女官と限定することには慎重を要するとの指摘もある。いずれにしても10世紀前半代と11世紀後半代のものが比較的まとまって出土し、出土位置は方格地割中央部が多く、斎王の居処と考えられる内院の鍛冶山西区画やそれに西接し、10世紀後半以降も内院の機能を担ったと考えられる牛葉東区画からのものが多いことから、ひらがな墨書土器の多くが斎王や近侍の人々に関連するものと考えるのが妥当である。現在斎宮跡で確認されているひらがな墨書土器で最も古いもの（８）は９世紀後葉のもので、これに関連し、斎宮跡から北西約７㎞に位置する松阪市堀町（ほりまち）遺跡で、ほぼ同時期のひらがな墨書土器の出土例があり注目される。堀町遺跡では、地域の字名のなかに「斎宮」があるなど、斎宮との関連も考えられる遺跡である。

その他文字以外にも、鳥や植物などを墨書・刻書するもの、人面墨書土器と呼ばれるものも確認されているが、斎宮跡出土の墨書・刻書土器は、官衙遺跡としては出土量が少なく、今後の調査に期待したい。



墨書土器実測図（1：4）

主な墨書・刻書土器一覧表

次数	墨書・刻書	性格	時期	器種	器形	位置等	重文番号(墨)	重文番号(刻)
4	☆(五芒星)	F	奈良	土師器	蓋			21
4	×と井	F	奈良	土師器	皿			22
8－3	仁	G	平安後	灰釉	椀	底外	2	
10	氏子	A	平安後	灰釉	段皿	底外	120	
10	伊	AB?	平安後	土師器	皿	底外	8	
19	久米?	G	平安後	灰釉	椀	底外	121	
20	泉	C	平安前	灰釉	皿	底外	126	
20	十	G	平安前	土師器	杯			24
21	鴨	ABD	奈良	土師器	杯	底外	127	
24	驛	B	平安前	須恵器	杯蓋	天井外	128	
25－6	万	E	平安後	灰釉	皿	底外	129	
26－4	＃	F	奈良	土師器	杯	底外 焼成後		26
28	寶　(印刻)	AE	平安前	須恵器	杯	底外		47
29	四条	C	平安前	土師器	皿	底外面	132	
29	殿	B	平安前	土師器	杯	外面		1
31－4	十	G	平安後	土師器	椀	底外	139	
32	北	F?	平安後	灰釉	椀	底外	143	
34	大	E	平安前	土師器	椀	底外	148	
34	萬	E	平安前	土師器	皿?	底外	145	
34	万	E	平安前	土師器	皿	底外	152	
34	井	CF	平安前	土師器	皿	底外	153	
34	秋	C	平安前	土師器	鍋	底外	154	
34	笠?	C	平安前	土師器	杯	底外	147	
34	年平	F	平安前	土師器	杯	底外	144	
34	万	G	平安前	土師器	皿	底外	149	
34	寮□	B	平安前	土師器	杯	底外	146	
37－4	水司鴨□	AB	平安前	土師器	杯	底外		3
37－4	大3点	G	平安前	土師器	杯・皿	底外		2,4,5
38	単	G	奈良	土師器	杯	底外	156	
38	十	G	?	土師器	皿	底外 焼成後		27
43－1	美濃　(印刻)	B	奈良	須恵器	杯	内面		48
44	平年?	F	平安後	灰釉	椀	底外	257	
46	景?	G	平安前	須恵器	皿	底外	167	
49	中	G	奈良	土師器	高杯	脚内	171	
49	薬	B	奈良	須恵器	蓋	表面	172	
50	十	G	平安後	土師器	杯	底外	173	
51	大?	E	平安後	灰釉	椀	底外		7
52	□東□	G	平安後	灰釉	椀	底外	175	
52	□□内	G	平安後	灰釉	椀	底外	174	
52	萬?	G	平安後	灰釉	椀	底外	176	
57	殿司	B	平安前	土師器	杯	底外	184	
57	九	G	平安前	灰釉	椀	底外	185	
58－1	九	G	不明	緑釉	椀	底外		8
58－1	文	G	平安前	黒色	椀	底外	187	
59	厨	BC	奈良	須恵器	杯	底外	189	
61	真	G	平安前	灰釉	椀	底外	191	
61	井	C	平安前	土師器	甕	口縁外	190	
62	＃	CF	奈良	土師器	杯	底外		33
63	十八	G	平安前	土師器	杯	底外	194	
63	大	E	平安前	土師器	杯	底外	193	
63	中□?	CF	平安前	灰釉	椀	底外	195	
65－2	九	G	奈良	土師器	高杯	脚内	196	
66	木	G	奈良	須恵器	杯	体外	197	
67	井	CF	奈良	須恵器	杯	底外	198	
67	☆(五芒星)	F	奈良	土師器	皿	底外		36
69	酒	ABC	奈良	土師器	甕	胴外	205	
69	始	G	平安前	土師器	杯	底外	204	
69	始	G	平安前	土師器	杯	底外	202	
69	炊?	BC	平安前	土師器	杯	底外	203	
69	豊	E	平安前	土師器	杯	底外	200	
70－1	麻	AC	奈良	土師器	杯	底外	207	
70－1	麻	AC	奈良	土師器	杯	底外		10
70－1	麻	AC	奈良	土師器	杯	底外		11
72－1	平三	G	平安前	土師器	皿	底外	210	
72－1	井	CF	平安前	土師器	杯	底外	209	
72－2	薗?	BC	平安前	土師器	皿	底外	211	
73	井	ABC	奈良	須恵器	蓋	蓋外	212	
75	水司	B	平安後	土師器	杯	底外	213	

次数	墨書・刻書	性格	時期	器種	器形	位置等	重文番号(墨)	重文番号(刻)
78	九	G	平安前	灰釉	皿	底外	214	
82－1	坂	A	奈良	須恵器	杯	底外	216	
82	𠂉椋人	A	奈良	土師器	杯	底外	224	
82	𠂉坂己	A	奈良	須恵器	杯	底外	216	
82	𠂉椋	A	奈良	土師器	杯?	底	219	
82	𠂉椋	A	奈良	土師器	高杯	脚内	220	
82	坂	A	奈良	須恵器	杯	底外	225	
82	𠂉坂己	A	奈良	須恵器	杯	底外	221	
82	水司鴨三	AB	奈良	土師器	皿	底外		12
82	蔵長	B	平安前	土師器	杯	底外	223	
82	清	C	平安前	灰釉	皿	底外	222	
82	仁	G	平安前	灰釉	椀	底外	217	
83	×	G	奈良	土師器	椀	底内		39
83	□□三	G	平安前	灰釉陶器	椀	底外	232	
83	西?	G	平安前	土師器	杯	底外	226	
83	厨	BC	平安前	土師器	高杯	脚	231	
83	伊	G	平安前	灰釉	皿	底外	234	
83	目代	B	平安前	灰釉	皿	底外	235	
83	少充殿	B	平安前	灰釉	皿	底外	236	
83	□福・□福福福	E	平安前	土師器	杯	底外	227	
84－1	男(外)、冨(内)	E?	平安後	灰釉	椀	底内外	239	
84－1	井	CF	平安前	土師器	杯	底外	237	
84－1	井	CF	平安前	土師器	杯	底外	238	
84－1	井	CF	平安前	土師器	杯	底外	229	
84－1	×	G	平安前	土師器	椀	底内		41
84－1	十	G	平安前	灰釉陶器	皿	底外	240	
86	府?	B	奈良	須恵器	杯	底外	248	
86	豊兆	F	奈良	土師器	甕	底外	245	
86	奉	G	平安前	須恵器	杯	底外	249	
86	三	G	平安前	土師器	杯	底外	246	
86	三	G	平安前	土師器	杯	底外	243	
86	大炊	B	平安前	土師器	杯	底外	244	
86	官	B	平安前	土師器	杯	底外	241	
86	周	G	平安前	土師器	杯	底外	250	
86	継?	G	平安前	土師器	杯	底外	242	
88	大	E?	奈良	土師器	皿	底?		14
88	三条の平行線と 五芒星	F	奈良	土師器	杯	底外		44
89－2	萬鏡	E?	平安後	灰釉	椀	底外	252	
90	水部	B	平安前	須恵器	杯蓋	天井外	255	
90	□佐	G	平安前	灰釉	椀	底外	262	
90	厨	BC	平安前	須恵器	蓋	天井外	256	
90	入	G	平安前	灰釉	椀	底外	259	
90	客?	C	平安後	灰釉	椀	底外	261	
90	鞍	BC	平安前	灰釉	椀	底外	260	
90	南	G	平安前	灰釉	椀	底外	258	
99	手	G	平安前	灰釉	椀	底外	269	
99	吉	E?	平安後	須恵器	猿面硯	裏面		硯143
104	本	G	平安後	土師器	杯	底外	270	
104	文	G	平安後	灰釉	皿	底外	271	
108	某	G	平安前	灰釉	壺	不明		18
111－3	井	CF	平安前	土師器	杯	底外	297	
111－3	十	G	平安前	土師器	椀	体外	299	
113	八	G	平安前	灰釉陶器	皿	底外	301	
115－1	高?	G	平安前	灰釉	椀	底外	340	
116－4	度	G	奈良	土師器	皿	底外	341	
118	六	G	奈良	土師器	皿	底外	342	
119	□部□	G	?	須恵器	壺	口縁外側		19
121－3	冨	E	平安前	灰釉	椀	底外	343	
124	膳	B	平安前	須恵器	蓋	天井上	347	
130	寺	G	平安前	土師器	杯	底外	351	
130	應	E	平安前	灰釉	椀	底外	354	
130	有	E	平安前	灰釉	椀	底外	353	
133	文	E	平安前	黒色	椀	底外	356	
133	月	G	平安前	土師器	杯	底外	355	
135	十	G	奈良	土師器	高杯	高杯脚内	357	
136	衆	G	平安前	灰釉	椀	底外	359	
146	新井	C	平安前	土師器	杯	底外	361	
146	郡領(?)殿	B	平安前	土師器	高杯	底外	362	
148	井	CF	?	土師器片		底外	363	

・本表はひらがな墨書土器を除く、ある程度判読可能な文字についての墨書・刻書土器の一覧表である。
・「次数」は斎宮跡調査次数である。
・「性格」はA個人名、B官司、C生活、D動物名、E吉祥句、F呪術、G断定不能とした
・土器の編年は、およそ『斎宮跡発掘調査報告I』の斎宮跡土器編年と対応しており、
　「奈良」は斎宮第I期
　「平安前」は斎宮第II期
　「平安後」は斎宮第III期
に当たる。ただしさらに厳密な調査が必要なものもある。

・「重文番号(墨)」は墨書土器の重文登録番号
・「重文番号(刻)」は刻書土器の重文登録番号

5）陶　硯

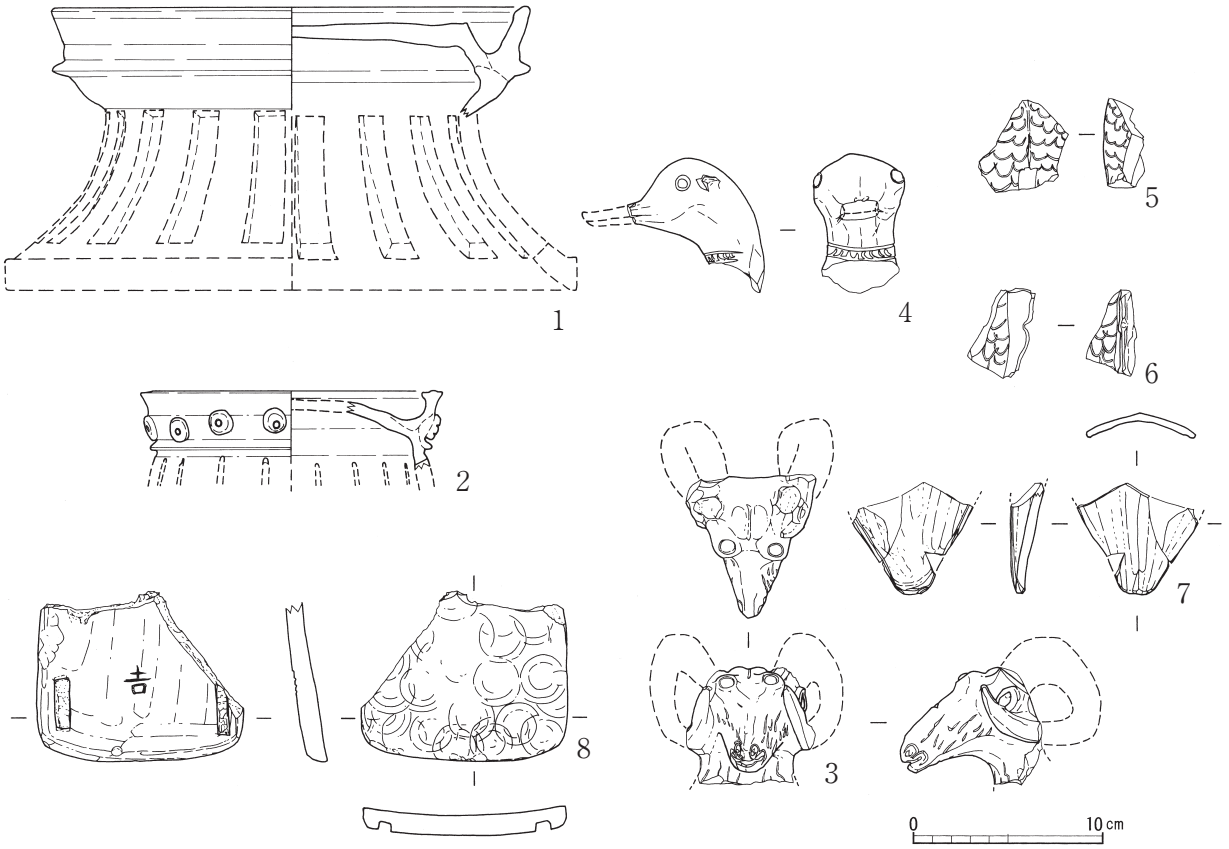
硯は、これまでに約150点が出土している。ほかに須恵器杯蓋等を利用した転用硯も多数出土しており、相当数があると考えられるが、正確な数が不明なためここでは省略する。

円面硯　約110点が確認されている。脚台部に透かしを施すもの、方形の透かしを２段に施すもの、長方形透かしと十字透かし・ヘラ描きを組み合わせたものなどがある。（１）は、史跡西部で行われた第107次調査のSK7220から出土した。硯面の１/３が残存し、復元すると直径24.6㎝になる大型の円面硯である。脚台部は欠損しているが、痕跡から幅2.0㎝の方形透かしが17本あったことがわかる。（２）は、第95次調査出土である。縁部外周に竹管文の装飾を施した円形浮文を貼付する。脚台部には幅３㎜程度の細い透かしが入る。

形象硯　斎宮跡からは、羊形（３）と鳥形（４）の２種類が出土している。羊形硯は、第91次調査で出土した。頭部のみ残存し、両角の大部分は欠損している。第90次調査のＳＥ6440から出土した鳥形硯も頭部のみの出土で、くちばしや胴部は欠損している。同調査で出土した陶器片（５・６）には羽毛を表現したと考えられる線刻があり、鳥形硯の蓋の一部と考えられる。また、第75次調査で出土した陶器片（７）は、その形状から鳥形硯の蓋と考えられるが、羽毛の表現がなく、第90次調査出土のものとは別個体のようである。

風字硯　これまでに22点が出土している。須恵器１点、灰釉陶器10点、緑釉陶器１点、黒色土器10点である。

猿面硯　これまで10点の出土が知られる。第99次調査のSD6869から出土した（８）は、ケズリ調整した背面中央部に「吉」の文字が線刻される。臍穴が刀子状の工具を用いてうがたれており、木製の脚を挿入していたと見られ、木枠などに装着されていたものとは考えにくい。また硯面はスタンプによる同心円によって青海波文が表現される。



陶硯類実測図（1：4）〔1・2：円面硯　3～7：形象硯　8：猿面硯〕

6）土馬

斎宮跡からは27箇所の調査で48点(第154次調査まで)が出土している。斎宮跡から出土する土馬は、馬具を表現したものが多く、頭部については都城で出土する土馬のように三日月状を呈するものはみられない。ただ馬具を表現するといっても、その馬具が装着される部位(頭部～胴部)が残る22点中、馬具表現が見られるのは11点なので、斎宮跡の土馬は必ず馬具を表現しているとはいえないだろう。

斎宮跡出土の土馬の代表といえるのが、朱彩大型土馬である（下図)。鼻と脚部・尾部を欠損しているが、残存長が30㎝ほどあり、三繋(さんがい)・鞍(くら)部等の馬具を粘土紐貼り付けにより表現している。また表面に竹管文を施し、ベンガラで彩色しているので、本来「丹彩(たんさい)」土馬と呼ぶべきものである。このような大型土馬が他の土馬と同様に考えてよいものか、津市高茶屋大垣内(たかぢゃや おおがいと)遺跡の古墳時代後期竪穴(たてあな)住居出土の大型土馬の例もあり、奈良時代とされる時期比定も含め、さらに検討を要する資料である。

出土遺構に着目すると、22点が遺構からの出土である。その内訳は、溝：12点、土坑：６点、井戸：２点、掘立柱建物・ピット：２点で、水に関わる遺構からの出土が多いといえるが、一つの遺構からまとまって出土するという状況ではない。また、完全な形状で出土するものはなく、必ず脚部などが欠損している。

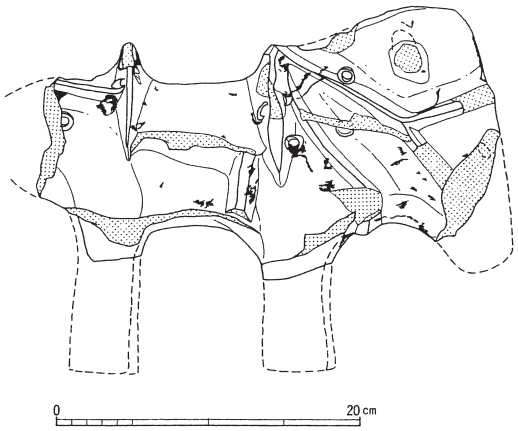
時期の分かるもので見ていくと、平安期に入ると断定できる７点のうち、頭部が残存するものは２点で、いずれも面繋(おもがい)等は表現しない。また、胴部が残存する５点を見ると、鞍部を表現するものは平安初期（斎宮編年Ⅱ－１段階）でこれについては障泥(あおり)も表現している。しかし、Ⅱ－２段階の溝上部の撹乱溝から出土した第89-２次調査例では鞍橋(くらはし)のみ、Ⅱ－３段階のものになると馬具は表現しない、いわゆる裸馬となる。斎宮跡では鞍部以外の馬具を表現するものは飛鳥～奈良期の土馬に限るということが、少ない例であるがうかがえる。

土馬について、馬具を装着するいわゆる「飾馬」と裸馬との差は、祭儀の差であると大場磐雄氏は述べている（大場「上代馬形遺物に就いて」《『考古学雑誌』第27巻第４号 1937》、同『祭祀遺跡－神道考古学の基礎的研究』1970）のに対し、小笠原好彦氏は、祭儀の差ではなく年代差であると述べているが（小笠原「土馬考」《『物質文化』25　1975》)、斎宮跡出土例から見ると小笠原氏の説が符合する。

胴部のつくりでは中空になるものと中実になるものがあるが、これについては時期的な差異はみられない。隣接する明和町北野遺跡でも同様で、一つの焼成坑に中空と中実が混在することはない。いずれも奈良時代の焼成坑であり、これは時期差ではなく土馬を製作する集団差の可能性が高い。

土馬が、『延喜式』巻五「斎宮」にある「鉄(くろがね)の人形(ひとがた)」のように、斎宮において祭祀に備え準備されたとの記録はない。竹内英昭氏は、斎宮での公式な祭祀ではなく、個人的に用いられた遺物と指摘する(竹内「五　朱彩土馬」《『明和町史　斎宮編』》2005)。

一方、土馬ではないが、第61次調査のSE4050から馬歯(ばし)が３点出土している。平安時代前期開削の井戸だが、馬歯は遺構検出面から約３ｍのところで出土している。この上層の埋土からはⅢ－１段階、平安時代後期の遺物が多量に出土していることから、馬歯は井戸廃絶時における祭祀に関わるものの可能性が指摘されている。10世紀末段階にあっても、斎宮では馬を用いた祭祀が行われていたことがわかる。



朱彩大型土馬（1：5）

7）小型模造品

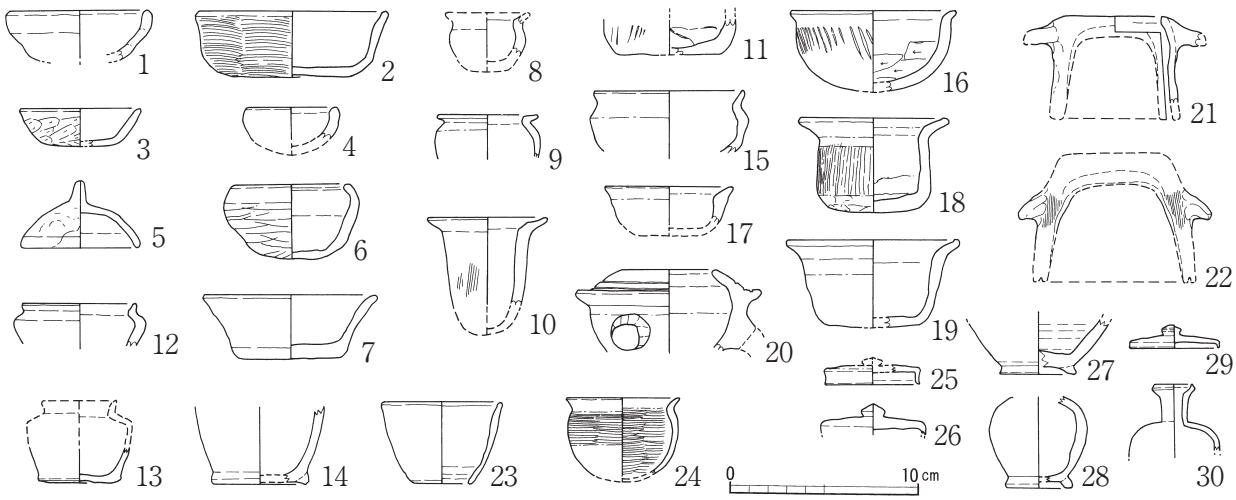
斎宮跡で出土する小型模造品とは、ミニチュア土器とも呼ばれ、実用品の土器を小型に表現したものである。形代として様々な祭祀に用いられたと考えられ、斎宮跡からは、これまでに200点を超える小型模造品が出土している。土師器や須恵器、黒色土器、灰釉陶器などがあり、形態は杯・椀などの供膳具をはじめ、壺・鉢などの貯蔵具、甕・羽釜・甑・竈などの煮沸具、円面硯など多彩な形態が見られる。つくりも、実物を忠実に模倣したものから簡略化されたものまで様々である。小型模造品の中には、煮沸具を模した物が多くみられる。斎宮で行われた年中行事の中には、竈神祭や忌火・庭火祭など火に関わるものがあり、こうした場で用いられた可能性も考えられる。小型模造品は８世紀代に出現し、主に９～10世紀代に用いられたようである。

土師器　小型模造品のうち、土師器に属するものが大部分を占める。種類も杯・椀・鉢・甕・竈など多彩である。（１・２）は杯で、（１）は灰白色で胎土に砂を含むなどつくりが粗雑であるのに対し、（２）は赤褐色を呈し外面にミガキを密に施すなど精緻なつくりのものである。（３）も土師器杯で、外面にケズリを施すなど実物の調整を忠実に模倣している。（４）は土師器盌。（５）は土師器蓋で、表面には指オサエ痕や粘土の継目が残るなどつくりはやや粗い。（６・７）は土師器鉢で、（６）は外面にミガキが施される丁寧なものである。（８～11）は甕。(10)は長胴甕を模したもので、外面には一部ハケメが残る。(12・13)は短頸壺で、(13)の底部には糸切り痕が残る。(14)は長頸壺の底部で、高台も表現されている。(15～20)は鍋。(16)は丸底の鍋で、外面にはハケメが、内面底部には強い指オサエが施されている。(17～19)は平底のもので、(18)は手ずくねでつくられ胎土もやや粗いが、外面には縦方向のハケメが施されている。体部下半には煤が付着する部分もみられる。(20)は三足鍋で、体部上半には鍔が付き、口縁部には２条の沈線が施されている。体部外面には煤が付着しており、鍔は赤変している。(21・22)は竈。(21)は胎土も粗く焼成も軟質でつくりも簡素である。(22)は微細な砂粒を含むものの焼成は良く、ハケメも施されるなどやや丁寧なつくりである。(23)は甑で、調整の表現は無く簡素なつくりである。

黒色土器　黒色土器の小型模造品は少ないが、平安時代前期の土坑より甕(24)が出土している。外面は体部上半および、内面は全面に丁寧なミガキが施される精緻なつくりのものである。

須恵器　(25)は奈良時代後期の土坑より出土した蓋で、器壁は薄くヘラケズリやナデなど実物を忠実に模倣している。(27・28)は壺で、ロクロを用い、高台も表現するなど丁寧につくられている。

灰釉陶器　(29)は杯蓋で、平安時代前期の土坑より出土している。薄く精緻なつくりで、外面に灰釉が施される。(30)は長頸壺で平安時代前期の土坑から出土したもので、器壁は薄く、口縁端部まで丁寧につくられている。

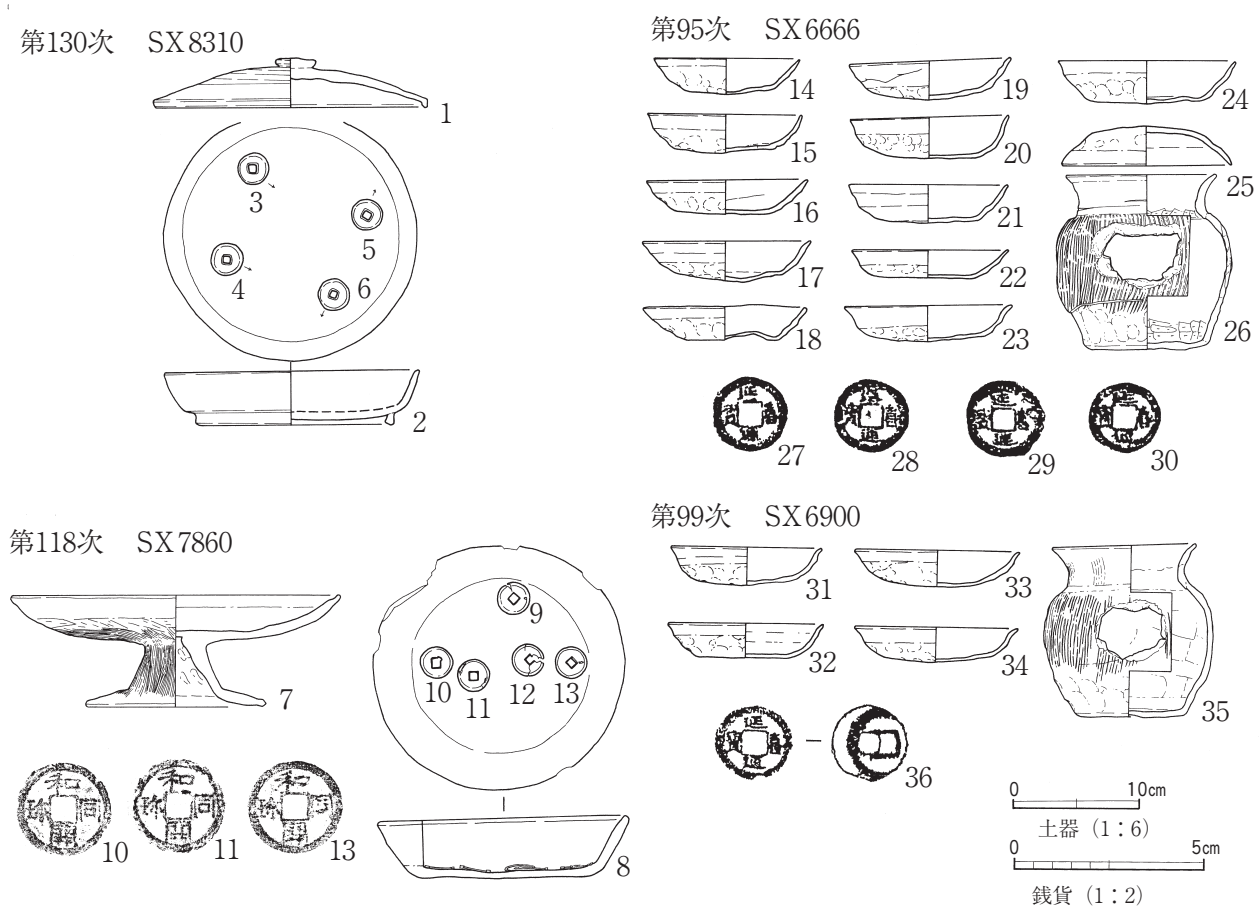


小型模造品実測図（1：4）〔1～23：土師器　24：黒色土器　25～28：須恵器　29・30：灰釉陶器〕

8）地鎮遺構出土遺物

斎宮跡では、４ヶ所の遺構より複数の銭貨が土器に納められた状態でみつかっており、いずれも地鎮に関わる遺構と考えられている。第130次調査SX8310では、須恵器杯身（２）の中に４枚の和同開珎（３～６）が納められ、杯蓋（２）により蓋されていた。第118次調査SX7860では、土師器高杯（７）によって蓋がされた土師器杯内（８）に５枚の和同開珎（９～13）が納められた。和同開珎には繊維の付着痕跡見られ、布状のものにくるまれていたか、袋に入れて納められていた可能性がある。これらの和同開珎は直径2.4～2.5㎝で、いずれも薄く、「開」が隷書風であることから、新和同に分類されるものである。また、いずれも文字面を下にして置かれており、ともに蓋がされるなど共通した意識のもとで埋納された可能性がある。SX7860・SX8310とも、平安時代前期の掘立柱建物の柱穴近くにあり、建物に関わる地鎮の可能性も考えられる。

第95次調査SX6666からは、土師器壺(26)と12点の土師器皿(14～25)が出土している。壺は横転していたが、埋納時は正立し、杯で蓋がされていたものと考えられる。甕は体部に大きく穿孔されており、中には21枚の銭貨と白色粘土片が納められていた。銭貨は腐食のため、４枚が延喜通寶(27～30)と確認できたのみであるが、他の銭貨も同種のものであった可能性が高い。第99次調査SX6900でも、土師器壺(35)と４点の土師器皿(31～34)が出土し、体部が大きく穿孔された甕の内部に銭貨10枚と白色粘土玉２個および白色粘土片が納められていた。銭貨は癒着や腐食が激しく、６枚が延喜通寶と判別できたのみであるが、銭貨の形態よりすべて同種のものであったと思われる。延喜通寶は直径1.9㎝程度とやや小振りで、SX6900から出土したものには裏面が鋳ズレしたもの(36)もみられる。SX6666とSX6900の土器は、いずれも平安時代中期のものであり、埋納形態も酷似することから、ほぼ同じ時期に埋納されたか、同様の目的で祭祀が行われた可能性が考えられる。斎宮跡では、他にも土坑から雲母片や長石塊が出土した例があり、これらも地鎮等の祭祀に用いられた可能性が考えられる。



地鎮遺構出土遺物実測図

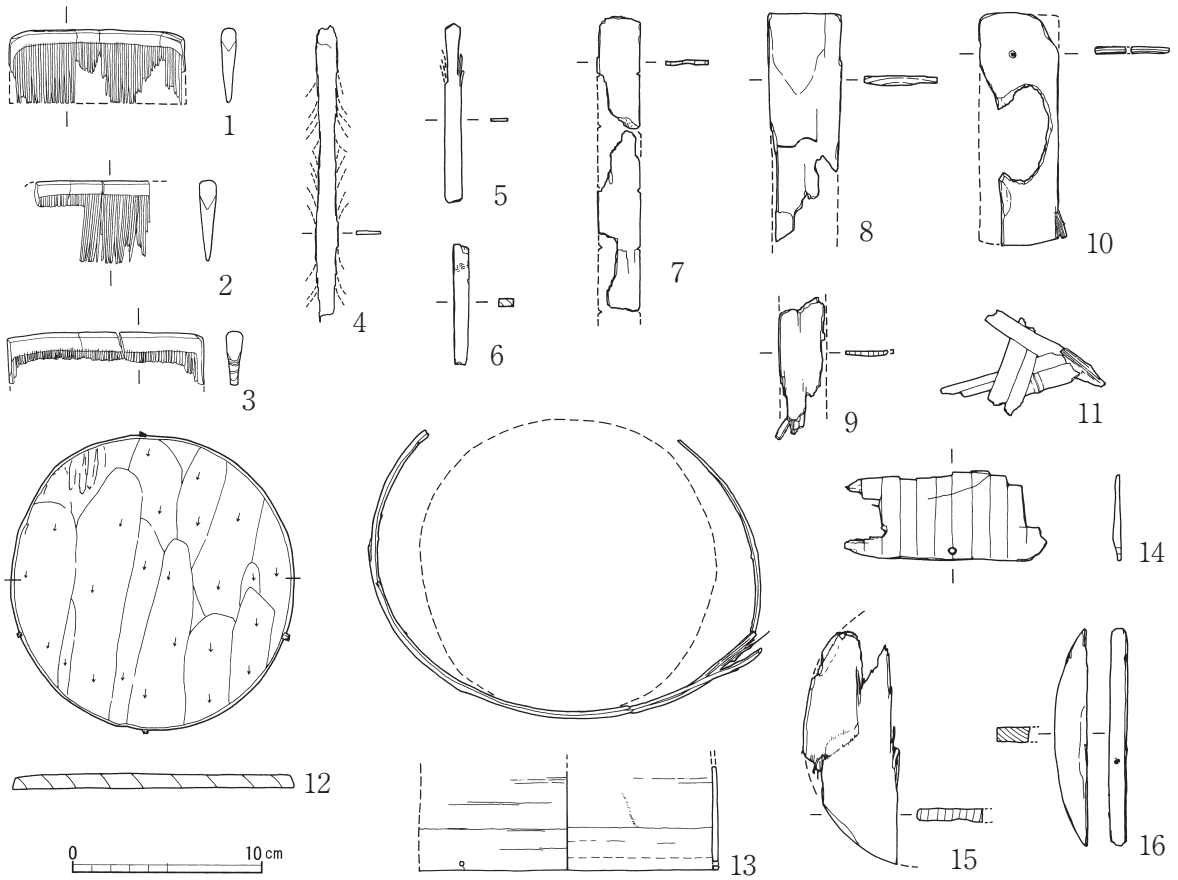
9）木製品

斎宮跡は史跡指定範囲の大部分が標高約９ｍ～14ｍの高燥な洪積台地であり、現在の地下水位も地表面下４ｍより低いため、井戸以外の遺構から木製品など有機物よりなる遺物は出土しない。また、史跡内唯一の沖積地である史跡西部の祓川周辺では、現在も水田耕作が行われている農業振興地域であるため、ほとんど発掘調査が行われていない。こうしたことから、前回の『斎宮跡発掘資料選』でも斎串、手斧柄（ちょうな え）、刀形（かたながた）、刀子柄、棒状木製品が数点紹介されていたのみであった。しかしその後、平成３年度の第90次調査で、平安時代前期の井戸SE6410の底部から９世紀後半頃のものとみられる多様な木製品が出土し、斎宮での祭祀や生活の一面をさらにうかがうことができるようになった。

横櫛（１～３）は、いずれも素木（そぎ）作りで、最も遺存状態のよい（１）で幅9.3㎝、高さ3.9㎝、厚さ7.5㎜である。意図的な投棄であれば、なんらかの呪術的な意味があったとも考えられる。斎串（４・５）は、完存するものはないが、幅約1.1㎝、厚さ1.5㎜の細い板の一端を剣先状に削って頭部を作り、側面は何条も削り込みをいれてささら状にしている。おそらく斎宮でも祭祀にあたって多量に使用されたのであろう。

縄状の緊縛痕のある棒状木製品（６）、木札類（７～９）、竹製籠状製品（11）や曲物（まげもの）（12～16）はいずれも何らかの実用品と考えられる。（７）は幅約2.2㎝、厚さ２㎜の薄い板だが、両側縁部に約３㎝おきに切込みが入り、物差として使用された可能性がある。曲物は、（12）などから直径14～16㎝程度のものが復元される。（10）は中央が大きく損傷しているが、端部に穿孔がみられ、紐を通してぶら下げたり束ねたりした可能性がある。斎宮跡では、これまで木簡類の出土をみていないが、将来の発見に期待を抱かせるものである。

斎宮跡においては、遺構の保護と調査の安全性の面から、井戸を底部まで完掘することは困難ではあるが、沖積地での調査も含め、さらなる斎宮の実態解明のためにも、今後の成果が期待される。



SE6410出土木製品実測図（1：4）

10）金属製品

斎宮跡から出土する金属製品は、膨大な土器類に比すれば当然ながらその出土量はわずかである。調査概報等で記述のある金属製品は遺構ごと、種類ごとで１件と集計しても、250件程である。しかしそれは多種多様であるので、不完全ながらも分類を行い、そこから窺える特徴を見ていくこととしたい。

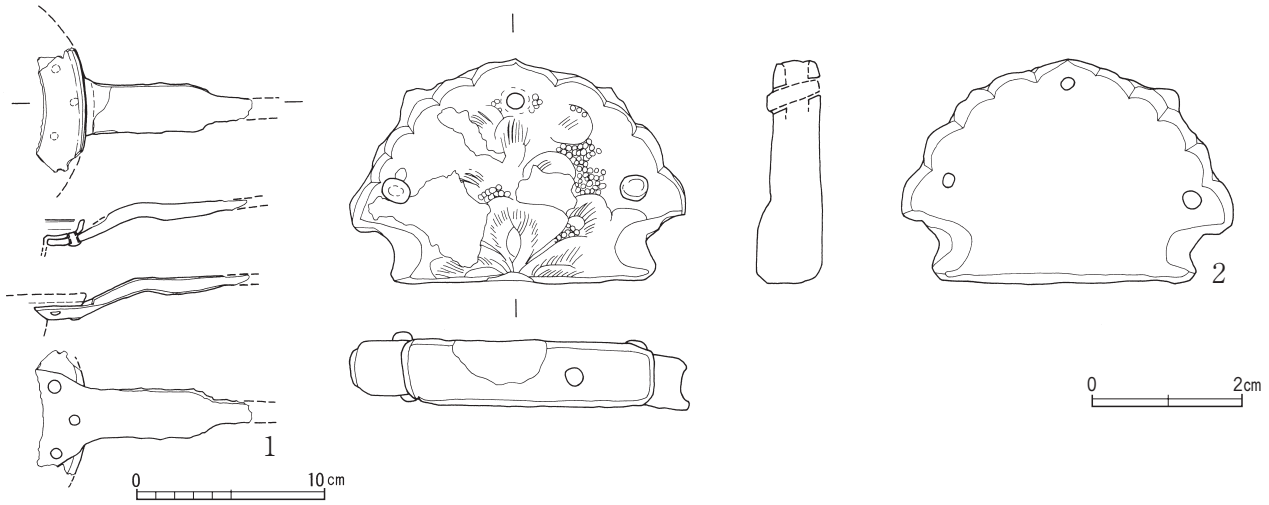
出土した金属製品をその用途・種類で分類すると、農工具類・武器類・馬具類・紡織具類・装身具類・銭貨、その他、不明品に分けられる。この中で鉄釘が40件以上あるが、その多くが斎宮Ⅳ期、鎌倉以降の中世墓から出土する。これは棺釘とみられるため、むしろ葬具といったほうが良いかもしれない。

第143次調査では、古代伊勢道を壊すように掘られたSH9001からフイゴの羽口・炉壁などとともに鉄釘・鉄滓（てっさい）が出土しており、これは方格地割造成に伴う工房であるとされている。鉄斧（てっぷ）・Ｕ字形鋤先（すきさき）・鉄鎌などいわゆる農工具類は古里地区の遺構から多く出土するが、東加座・西加座地区など方格地割の北東部でも比較的集中して出土している。調査数の関係もあろうが、特に東加座地区からは、斎宮Ⅰ－３段階～Ⅱ－１段階に属する鉄斧・鉄鎌などが比較的多く出土する。この時期はまさに方格地割造営にもあたる頃であり、斎宮の大規模造営の状況を金属製品が表しているといえる。

馬具類はわずか４点の出土であるが注目できる。第５次・137次調査出土の馬具は帯金具で、特に第137次のものは表面に鏨彫（たがねぼ）りによる文様を施す。時期は共伴資料から斎宮Ⅰ－１～２段階とされるが、隣接する伊勢市二俣町塚山出土の金銅製馬具との関連からも妥当な時期である。平安時代前期とみられる第108次調査の金銅製蛇尾（だび）の出土とあわせ、官衙としての斎宮の一端を示すものである。

一方、第133次調査出土の金銅製釦（ぼたん）は製作技法でも注目される。分析によると表側は金アマルガムによるめっき、裏側は金箔張りと技法を違えており、裏側まで視覚的効果を狙ったものであろうか。また、第31-4次調査で出土した金銅製品（２）は、表面に毛彫りで花弁状の図柄を描き、魚々子文（ななこもん）を施す。これらの文様は片面にしか見られない。３か所に鋲（びょう）を打ち、用途は不明であるが箱状製品の飾金具の可能性がある。今後、伝世品など類例の検索により明らかになるものと思われる。鏡類は破鏡（はきょう）などもあるが、ほとんどが平安後期以降のものであり、中世墓の副葬品あるいは祭具としての役割も考えられる。井戸から出土するものについては、祭祀具といえるであろう。その他特殊な製品としては、第20次調査で出土した熨斗（のし）（１）がある。これは火皿部が銅製、柄部が鉄製でつくられる。

以上、雑駁な記述であったが、金属製品という大きなくくりで斎宮跡を見ると、斎宮のごく一面が明らかにできるのである。その他、金銅製Ｌ字形金具・金銅製毛彫飾金具など、その用途は知れないまでも、華やかなる斎宮の一端が金属製品からもうかがえるのである。



金属製品〔1：第20次調査出土熨斗（1：4）2：第31-4次調査出土不明金銅製品（1：1）〕

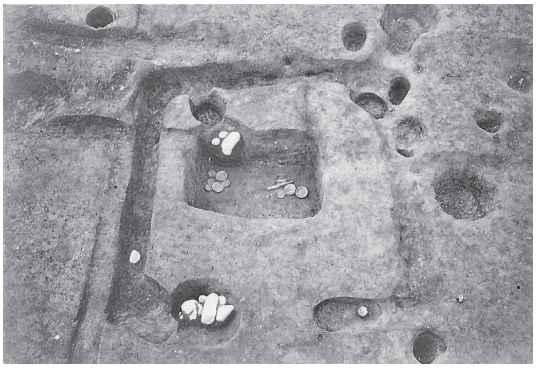
11）中世墓の出土遺物

斎宮跡では中世での実態の解明が課題となっているが、鎌倉時代を中心に中世墓の遺構の確認例は蓄積している。古里地区の第３次・７次調査で土坑墓とみられるものが発見されて以来、史跡中央部の第15次調査のSX3380、第49次調査のSX2990のほか、断片的に墓坑の可能性のあるものが見つかっており、さらに全体の形式や規模、副葬品の在り方が分かる事例が、平成に入ってから増加した。

史跡中央部の近鉄斎宮駅北側の第93次調査ではSX6533・SX6534・SX6537の３基の土坑墓を発見した。いずれも方形ないしは楕円形の墓坑を持つが、特にSX6533では、長辺1.3mの墓坑を2.9m四方の周溝で囲んでおり、墳丘墓であったと考えられるものである。周溝内では土師器の小皿がみられたのみだが、墓坑内から鉄製短刀・石製硯・土師器皿３枚と、大小の土師器皿６枚の２群の副葬品が出土した。この硯は非常に使い込まれたもので、硯面が深く磨耗している。隣接するSX6534は周溝を持たず、長辺1.2ｍの墓坑から山茶椀と土師器皿７枚が出土した。SX6537は長径1.3ｍの楕円形の墓坑で、鉄製短刀・龍泉窯系青磁椀・常滑産広口壺・土師器小皿４枚が副葬品として出土した。第93次調査の中世墓群は鎌倉時代中ごろから後半にかけてのものとみられるが、このような豊富な副葬品を持つ遺構例はほかにはない。

同じく史跡中央部の第101次調査でも、土坑墓３基（SX6975・SX6977・SX6976）が群を成しているのが発見されている。長辺1.5～1.6ｍ程度の方形の墓坑を持ち、鉄製短刀や大小の土師器皿類や山茶椀の他、古瀬戸椀片や土師器鍋類が出土する点が第93次調査の墓群と異なる。

現在、中世墓は可能性のあるものを含めて12世紀末から14世紀初めとみられる約40基を確認しているが、史跡西部の集落縁辺部と考えられる地域で見つかっている他は、第93次・101次調査の例のように、平安時代の方格地割域の周縁部であり、道路の際に位置するものが多いことも注目される。墓に対する、中世斎宮の人々の意識が如実に反映したものといえるだろう。実態が依然として不明な中世の斎宮だが、こうした断片的な遺構を探求していく事により、その核心に迫れる可能性は高いと考えられる。



第93次 SX6533

第93次 SX6537

第93次 SX6533詳部

第101次 SX6975

Ⅳ．図版掲載資料一覧表（資料名の前の○があるものは重要文化財）

写真番号		資　料　名	調査次数	出土遺構	時期	図版
1		○緑釉陶器陰刻花文香炉蓋	130	包含層	平安前期	1
2		○緑釉陶器把手付瓶	98	包含層	平安前期	2
3		○緑釉陶器唾壺	105・109	SK7425	平安前期	2
4		○緑釉陶器大鉢片	8-9・59・116-2	SK0190ほか	平安後期	2
5	①	○緑釉陶器陰刻花文陶片	135	包含層	平安前期	3
	②	○緑釉陶器陰刻花文陶片	83	SK5790	平安前期	3
	③	○緑釉陶器陰刻花文陶片	124	SK6792	平安前期	3
	④	○緑釉陶器陰刻花文陶片	133	SD1842	平安前期	3
	⑤	○緑釉陶器陰刻花文陶片	83	SE5850	平安前期	3
6		○緑釉陶器香炉・レプリカ	109	ピット	平安前期	3
7	①	○緑釉単彩陶器　高杯	83・84-1	SE5850ほか	奈良末期～平安初期	4
	②	○緑釉単彩陶器　高杯	83・84-1	SE5850ほか	奈良末期～平安初期	4
	③	○緑釉単彩陶器　高杯	83・84-1	SE5850ほか	奈良末期～平安初期	4
	④	○緑釉単彩陶器　火舎	140	SK8842	奈良末期～平安初期	4
	⑤	○緑釉単彩陶器　火舎	86	SK6012	奈良末期～平安初期	4
	⑥	○緑釉陶器不明製品	143	包含層	平安前期	4
8		○緑釉陶器陰刻花文陶片	9-1	SD0337	平安前期	4
9		○緑釉陶器枕	114	SK7668ほか	平安か	4
10		○緑釉陶器陰刻花文陶片	44	SK2650	平安（9世紀）	4
11		○SK2650出土遺物（編年基準資料）	44	SK2650	平安（9世紀）	4
12	①	○貿易陶磁　白磁椀	116-1	南北溝	平安（9～11世紀）	5
	②	○貿易陶磁　白磁椀	103	包含層	平安（9～11世紀）	5
	③	○貿易陶磁　白磁椀	116-5	撹乱土坑	平安（9～11世紀）	5
	④	○貿易陶磁　白磁椀	108	SK7321	平安（9～11世紀）	5
	⑤	○貿易陶磁　白磁椀	114	SB7641	平安（9～11世紀）	5
	⑥	○貿易陶磁　白磁椀	8-9	－	平安（9～11世紀）	5
	⑦	○貿易陶磁　白磁椀	130	SK8235	平安（9～11世紀）	5
	⑧	○貿易陶磁　白磁椀	118	包含層	平安（9～11世紀）	5
	⑨	○貿易陶磁　越州窯系青磁椀	109	SK7425	平安（9～11世紀）	5
	⑩	○貿易陶磁　越州窯系青磁椀	109	SK7432	平安（9～11世紀）	5
	⑪	○貿易陶磁　越州窯系青磁椀	124	SD6750	平安（9～11世紀）	5
	⑫	○貿易陶磁　越州窯系青磁壺	98	SD6750	平安（9～11世紀）	5
	⑬	○貿易陶磁　越州窯系青磁椀	95	SD0244	平安（9～11世紀）	5
	⑭	○貿易陶磁　越州窯系青磁唾壺	42-2	包含層	平安（9～11世紀）	5
	⑮	○貿易陶磁　越州窯系青磁皿	20	包含層	平安（9～11世紀）	5
	⑯	○貿易陶磁　越州窯系青磁椀	64-2	－	平安（9～11世紀）	5
	⑰	○貿易陶磁　越州窯系青磁椀	8-10	－	平安（9～11世紀）	5
	⑱	○貿易陶磁　越州窯系青磁椀	28	包含層	平安（9～11世紀）	5
13	①	○貿易陶磁　初期高麗青磁椀	117-1	SK7813	平安末期	5
	②	○貿易陶磁　初期高麗青磁椀	54	ピット	平安末期	5
	③	○貿易陶磁　初期高麗青磁椀	8-4	SD0168	平安末期	5
	④	○貿易陶磁　初期高麗青磁椀	4	溝	平安末期	5
	⑤	○貿易陶磁　初期高麗青磁椀	79	包含層	平安末期	5
14		○貿易陶磁　越州窯系青磁輪花椀・レプリカ	42-1	包含層	平安（9～11世紀）	5
15		○羊形硯	91	包含層	奈良中期	6
16		○鳥形硯	90	SE6440	奈良後期～平安前期	6
17	①	○土馬	3	SD0050	奈良	7
	②	○朱彩大型土馬	3	SD0050	奈良か	7
	③	○土馬	3	SD0050	奈良	7
	④	○土馬	63	SD2357	奈良	7
	⑤	○土馬	4	SD0065	奈良	7
	⑥	○土馬	89-2	撹乱溝	奈良	7
	⑦	○土馬	84-1	SK5893	平安	7
	⑧	土馬	154	SK9860	奈良	7
	⑨	○土馬	80	SE5380	奈良	7
18	①	○小型模造品　土師器長胴甕	109	SK7430	平安前期	7
	②	○小型模造品　土師器甕	120	SB7992	平安前期	7
	③	○小型模造品　土師器甕	115-1	包含層	平安か	7
	④	○小型模造品　土師器鍋	88	SK6245	平安か	7
	⑤	○小型模造品　須恵器鉢	90	SE6440	平安前期	7
	⑥	○小型模造品　土師器皿	96-3	SD6828	平安か	7
	⑦	○小型模造品　須恵器蓋	130	SK8315	平安前期	7
19	①	京都系土師器　椀	113	SE7600	平安後期	8
	②	○京都系土師器　高杯	61	SE4050	平安後期	8
	③	京都系土師器　椀	113	SE7600	平安後期	8
	④	京都系土師器　椀	113	SE7600	平安後期	8
	⑤	京都系土師器　台付小皿	114	包含層	平安後期	8
	⑥	京都系土師器　皿	114	包含層	平安後期	8
	⑦	京都系土師器　皿	114	包含層	平安後期	8
	⑧	京都系土師器　台付小皿	113	SE7600	平安後期	8
20	①	須恵器壺Ｇ	143	SH9001	奈良末期～平安初期	8
	②	須恵器壺Ｇ	66	SE4401	奈良末期～平安初期	8
21		須恵器大型甕	139	SK8681	奈良	8
22		○墨書土器「目代」（灰釉陶器皿）	83	SE5850	平安前期	9
23		○墨書土器「少允殿」（灰釉陶器椀）	83	SE5850	平安前期	9
24		○墨書土器「伊」（灰釉陶器皿）	83	SE5850	平安前期	9
25		○墨書土器「大炊」（土師器杯）	86	SK6013	平安前期	9
26		○墨書土器「豊兆」（土師器鉢）	86	SK6030	平安前期	9
27		○墨書土器「四条」（土師器皿）	29	SK1420	平安前期	10
28		○刻書土器「殿」（土師器杯）	29	包含層	平安前期	10
29		○墨書土器「應」（灰釉陶器椀）	130	SD2340	平安前期	10

写真番号		資　料　名	調査次数	出土遺構	時期	図版
30		○墨書土器「萬鏡」（灰釉陶器椀）	89-2	SE6605	平安（10世紀）	10
31		○鳥墨画土器（土師器片）	86	SD6050	奈良末期～平安初期	10
32		○鳥墨画土器（土師器皿）	114	SK7670	平安末期～鎌倉	10
33		○ひらがな墨書土器（土師器皿）	44	SK2650	平安（9世紀）	11
34		○ひらがな墨書土器（土師器台付小皿）	124	包含層	平安（10世紀）	11
35	①	○ひらがな墨書土器（土師器皿）	10	土坑	平安（10～11世紀）	11
	②	○ひらがな墨書土器（土師器皿）	10	－	平安（10～11世紀）	11
	③	○ひらがな墨書土器（土師器皿）	10	－	平安（10～11世紀）	11
	④	○ひらがな墨書土器（土師器皿）	98	SD6750	平安（10世紀）	11
	⑤	○ひらがな墨書土器（土師器皿）	10	－	平安（10～11世紀）	11
36	①	○金銅製帯金具	108	SK7274	平安前期	12
	②	○石帯（鉈尾）	98	包含層	平安	12
	③	○石帯（鉈尾）	52	SB3260	平安初期	12
	④	○石帯（丸鞆）	8-10	ピット	平安	12
	⑤	○石帯（丸鞆）	133	包含層	平安	12
	⑥	○石帯（丸鞆）	56	包含層	平安	12
	⑦	○石帯（丸鞆）	23	SB1155	平安中期	12
	⑧	○石帯（丸鞆）	史跡内表採	－	平安か	12
	⑨	○石帯（丸鞆）	54	包含層	平安	12
	⑩	○石帯（丸鞆）	51	SK3130	平安初期	12
37		○金銅製馬具	137	SK8647	奈良か	12
38		○金銅製馬具	5	包含層か	奈良か	12
39		○金銅製Ｌ字形金具	108	SK7305	平安	12
40		○用途不明金銅製品	31-4	SE2000	平安	12
41		○金銅製釦	133	SE8391	平安	12
42		○金銅製毛彫金具	114	SK7663	平安	12
43	①	○須恵器　鉄鉢形	21-1	SK1098	奈良中期	13
	②	○須恵器　蓋	88	SK6210	奈良中期	13
	③	○須恵器　盤	21-1	SK1098	奈良中期	13
	④	○須恵器　高杯	21-1	SK1098	奈良中期	13
	⑤	○須恵器　杯	88	SK6210	奈良中期	13
	⑥	○須恵器　杯	88	SK6210	奈良中期	13
	⑦	○須恵器　杯	88	SK6210	奈良中期	13
44		○灰釉陶器把手付瓶	90	SB6446	平安前期	13
45		須恵器長頸瓶	98	SK6815	平安前期	13
46	①	○須恵器円面硯	89-2	－	平安	14
	②	○須恵器大型円面硯	107	SK7220	奈良	14
47	①	○須恵器円面硯	113	SB7601	平安	14
	②	○須恵器円面硯	98	SK6747	平安	14
	③	○須恵器円面硯	51	SK3137	奈良末期～平安初期	14
	④	○須恵器円面硯	86	表土	奈良～平安	14
	⑤	○須恵器円面硯	10	－	奈良～平安	14
	⑥	○須恵器円面硯	108	包含層	平安	14
	⑦	○須恵器円面硯	95	包含層	平安	14
	⑧	○須恵器円面硯	57	SK3720	奈良末期～平安初期	14
48		○須恵器「吉」刻字猿面硯	99	SB6869	平安後期～末期	14
49		○地鎮遺構ＳＸ7860出土遺物	118	SX7860	奈良中期	15
50		○地鎮遺構ＳＸ8310出土遺物	130	SX8310	奈良末期～平安初期	15
51		○地鎮遺構ＳＸ6666出土遺物	95	SX6666	平安（10世紀）	15
52		○墨書土器「衆」（灰釉陶器椀）	136	SB8542	平安前期	16
53		○墨書土器「寺」（土師器）	130	SK8315	平安前期	16
54		○墨書土器「福福・・・」（土師器杯）	83	SE5850	平安前期	16
55		○墨書土器「奉」（須恵器杯）	86	包含層	平安前期	16
56		○墨書土器「井」（土師器杯）	111-3	SD7478	平安初期	16
57		○墨書土器「椋人」（土師器杯）	82-1	SK5650	奈良	16
58		○木製品　横櫛	90	SE6410	平安前期	17
59		○木製品　横櫛	90	SE6410	平安前期	17
60		○木製品　横櫛	90	SE6410	平安前期	17
61		○木製品　斎串	90	SE6410	平安前期	17
62		○木製品　斎串	90	SE6410	平安前期	17
63		○用途不明木製品	90	SE6410	平安前期	17
64		○木製品　曲物底板	90	SE6410	平安前期	17
65		○籠状製品	90	SE6410	平安前期	17
66		○土製サイコロ	114	包含層	平安	17
67		○鉄製品　錘	109	SB7410	平安前期	18
68		○鉄製品　雁股鏃	108	SK7260	平安前期	18
69		青銅製品　刀拵	8-7	SB?	鎌倉か	18
70		○青銅製品　熨斗	20	SK1048	平安か	18
71		○用途不明鉄製品	19	土坑	平安か	18
72	①	鉄製品　火打金	49	SK3002	奈良か	18
	②	鉄製品　火打金	5	－	不明	18
	③	鉄製品　火打金	8-8	土坑	不明	18
	④	鉄製品　火打金	49	SK2981	鎌倉	18
	⑤	鉄製品　火打金	98	SB6720	平安	18
	⑥	鉄製品　火打金	2	SK9559	室町	18
	⑦	鉄製品　火打金	7	－	不明	18
	⑧	鉄製品　火打金	153	SE9835	平安後期	18
73		中世墓ＳＸ6533出土遺物	93	SX6533	鎌倉	19
74		中世墓ＳＸ6537出土遺物	93	SX6537	鎌倉	19
75		中世墓ＳＸ6975出土遺物	101	SX6975	鎌倉	19

Ⅴ．史跡斎宮跡　発掘調査一覧表

調査次数	調査年度	調査地字名等	掲載遺物	地図
1	昭和45	古里		B2･C2
2	昭和46	中垣内	72-⑥	B2･C2
3	〃	中垣内古里	**17-①②③**	B2
4	昭和47	古里	**13-④･17-⑤**	C2
5	昭和48	古里	**38**･72-②	B1･C1
6−1	〃	苅干･楽殿（範囲確認AT）		E1･2
6−2	〃	苅干（範囲確認BT）		E1･F1
6−3	〃	楽殿（範囲確認CT）		E2･F2
6−4	〃	楽殿･西前沖（範囲確認DT）		F2
6−5	〃	下園（範囲確認ET）		E2
7	昭和49	中垣内古里	72-⑦	B2･C2
8−1	〃	塚山･篠林（範囲確認FT）		D2･E2
8−2	〃	篠林･上園（範囲確認GT）		E2･E3
8−3	〃	篠林･上園（範囲確認HT）		D2･3
8−4	〃	塚山･広頭（範囲確認IT）	**13-③**	D2･3
8−5	〃	塚山･上園（範囲確認JT）		D2
8−6	〃	塚山（範囲確認KT）		C2･D2
8−7	〃	広頭･上園（範囲確認LT）	69	D3
8−8	〃	内山･広頭（範囲確認MT）	72-③	D3
8−9	〃	御館･柳原（範囲確認NT）	**4･12-⑥**	E3
8−10	〃	柳原･楽殿（範囲確認OT）	**12-⑰･36-④**	F3
8−11	〃	東裏･塚山（範囲確認PT）		C2
9−1	昭和50	鈴池（範囲確認QT）	**8**	E4
9−2	〃	木葉山（範囲確認RT）		D4
9−3	〃	木葉山（範囲確認ST）		D4
9−4	〃	東前沖（範囲確認TT）		G2
9−5	〃	コオロギ（範囲確認UT）		G2
9−6	〃	東加座･木戸垣外（範囲確認VT）		G3
9−7	〃	笛川（範囲確認WT）		G4
9−8	〃	西前沖（範囲確認XT）		F2
9−9	〃	牛葉･鈴池（範囲確認YT）		F4
9−10	〃	上園（範囲確認ZT）		D3
10	〃	西前沖･西加座･鍛冶山･中西（広域圏道路）	**35-①②③⑤･47-⑤**	F1～4
11−1	〃	西加座		F3
11−2	〃	西加座		F3
11−3	〃	東前沖		G2
11−4	〃	下園		E2
12−1	昭和51	塚山（範囲確認2AT）		C2
12−2	〃	上園（範囲確認2BT）		E3
12−3	〃	東裏（範囲確認2CT）		C3
12−4	〃	内山（範囲確認2DT）		E3
13−1	〃	東加座		G2
13−2	〃	東加座		G2
13−3	〃	斎宮古里		D1
13−4	〃	楽殿		E2
13−5	〃	御館		E3
13−6	〃	中垣内		B3･C3
13−7	〃	東裏		C3
13−8	〃	西加座		F3
13−9	〃	西加座		F3
13−10	〃	東裏		C3
13−11	〃	西加座		F3
13−12	〃	西加座		F3
13−13	〃	東前沖		G2
14−1	昭和52	コオロギ（範囲確認2ET）		G2
14−2	〃	コオロギ（範囲確認2FT）		G2
14−3	〃	東加座･木戸垣外（範囲確認2GT）		G3
14−4	〃	東加座･木戸垣外（範囲確認2HT）		G3
14−5	〃	鍛冶山･順名垣外（範囲確認2IT）		G3
15	昭和52	東裏･広頭（斎宮小）		C3
16−1	〃	東裏（竹川町道A）		C3
16−2	〃	東裏･広頭（竹川町道B）		C3
16−3	〃	東裏（竹川町道C）		C3
16−4	〃	中垣内（竹川町道D）		B3
16−5	〃	中垣内（竹川町道E）		A3
16−6	〃	中垣内（竹川町道F）		B3
17−1	〃	牛葉		F4
17−2	〃	牛葉		F4
17−3	〃	西加座		F3
17−4	〃	楽殿		F1
17−5	〃	楽殿		F1･2
17−6	〃	出在家		D1
17−7	〃	出在家		D1
17−8	〃	楽殿		F2
17−9	〃	西前沖		F2
18	昭和53	下園		F2･3
19	〃	御館	**71**	E3
20	〃	柳原	**12-⑮･70**	F3
21−1	〃	鍛冶山	**43-①③④**	G3
21−2	〃	西加座		F3
21−3	〃	西前沖		F2
21−4	〃	西加座		F3
21−5	〃	東前沖		G2
21−6	〃	古里		C1
21−7	〃	東前沖		F2
21−8	〃	楽殿		E2
21−9	〃	篠林		E2
22−1	〃	コオロギ		G2
22−2	〃	木戸垣外		G3
22−3	〃	盃･柳井田		G4
23	昭和54	下園	**36-⑦**	F2
24	〃	西加座		G3
25−1	〃	牛葉2		D4
25−2	〃	斎宮古里		C1
25−3	〃	篠林		D1
25−4	〃	牛葉		E4
25−5	〃	鍛冶山		G3
25−6	〃	西加座		F3
25−7	〃	下園		E2
25−8	〃	西前沖		F2
25−9	〃	広頭		D3
25−10	〃	鈴池		E4
25−11	〃	東裏		C3
25−12	〃	楽殿		E1
25−13	〃	西加座		F3
26−1	〃	中西（農業基盤整備）		F4
26−2	〃	鈴池･木葉山･南裏（農業基盤整備）		D4
26−3	〃	鈴池（農業基盤整備）		E4･F4
26−4	〃	木葉山･南裏（農業基盤整備）		C4
27	〃	東裏		C3
28	〃	柳原		F3
29	〃	鍛冶山･西加座･東加座（中町地区トレンチ調査）	**12-⑱**	F3･G3
30	昭和55	中垣内	**27･28**	B3
31−1	〃	内山		D3･4
31−2	〃	南裏		B4
31−3	〃	古里		C1
31−4	〃	牛葉	**40**	E4
31−5	〃	塚山		D2
31−6	〃	古里		C1
31−7	〃	東加座		G3
31−8	〃	広頭		D4

調査次数	調査年度	調査地字名等	掲載遺物	地図
31−9	昭和55	東前沖		G2
31−10	〃	内山（斎宮駅ホーム）		E3
31−11	〃	木葉山		E4
31−12	〃	木葉山		E4
32	〃	塚山		D2
33	〃	篠林		D2
34	〃	西加座		F3
35	〃	西前沖・東前沖・東加座（中町トレンチ調査）		G2・3
36	昭和56	中垣内		B2
37−1	〃	西前沖		F2
37−2	〃	牛葉		E4
37−3	〃	西前沖		F2
37−4	〃	西前沖		F2
37−5	〃	西前沖		F2
37−6	〃	古里		C1
37−7	〃	苅干		E1
37−8	〃	木葉山		D4
37−9	〃	東加座		G3
37−10	〃	篠林		E2
37−11	〃	内山		E3
37−12	〃	西加座		F3
37−13	〃	東加座		G3
38	〃	塚山		C2
39	〃	古里		C1
40	〃	東加座		G3
41	〃	斎宮古里・塚山・西加座・東加座・鍛冶山（C地区トレンチ調査）		C2・D1・F2・3・G3
42−1	昭和57	下園	**14**	E2
42−2	〃	下園	**12-⑭**	E2
43−1	〃	出在家		D1
43−2	〃	木葉山		E4
43−3	〃	南裏		C4
43−4	〃	木葉山		D4
43−5	〃	篠林・苅干		E1
43−6	〃	東前沖		G2
43−7	〃	古里		C1
43−8	〃	牛葉		E4
44	〃	鍛冶山	**10・11・33**	F3
45	〃	楽殿		E2
46	〃	鍛冶山		G3
47	〃	西加座・御館・宮ノ前・上園		D3・E2・3・F2
48−1	昭和58	広頭（斎宮小）		C3・D3
48−2	〃	牛葉		D4
48−3	〃	中垣内		B3
48−4	〃	東前沖		G2
48−5	〃	西前沖・東前沖（町道側溝）		F2・G2
48−6	〃	西前沖		F2
48−7	〃	木葉山		E4
48−8	〃	東裏		C3
48−9	〃	鈴池		E4
48−10	〃	牛葉（町道側溝）		E4
48−11	〃	鍛冶山		G3
48−12	〃	西前沖		F2
48−13	〃	東裏（斎宮小）		C3
48−14	〃	牛葉（町道側溝）		E4
49	〃	上園	72-①④	D3
50	〃	東裏		C2
51	〃	西加座	**36-⑩・47-③**	F2
52	〃	西加座	**36-③**	G2
53−1	昭和59	東裏（斎宮小）		C3
53−2	〃	古里		D1
53−3	〃	古里		C1
53−4	〃	東裏		C4
53−5	〃	木葉山		D4
53−6	〃	鍛冶山（町道側溝）		G3
53−7	〃	篠林		D1
53−8	昭和59	東前沖		G2
53−9	〃	木葉山		D4
53−10	〃	斎宮古里		C1
53−11	〃	木葉山		D4
53−12	〃	中垣内		B3
53−13	〃	牛葉		E4
53−14	〃	東裏（斎宮小）		C3
53−15	〃	西加座		F3
54	〃	西前沖		F2
55	〃	御館・柳原	**13-②・36-⑨**	E3
56	〃	東裏		C3
57	〃	東加座	**36-⑥**	G2
58−1	昭和60	西加座	**47-⑧**	F3
58−2	〃	西加座		F3
58−3	〃	東裏・広頭（斎宮小）		C3・4
58−4	〃	中垣内		A3
58−5	〃	牛葉（町道側溝）		E4
58−6	〃	木葉山		D4
58−7	〃	中西		G4
58−8	〃	中垣内		B3
59	〃	広頭		D3
60	〃	東加座	**4**	G3
61	〃	西加座		F2
62	〃	東加座	**19-②**	G3
63	〃	西加座		F3
64−1	昭和61	牛葉	**17-④**	D4
64−2	〃	東加座		G3
64−3	〃	篠林		D1・2
64−4	〃	笛川	**12-⑯**	G4
64−5	〃	東裏（斎宮小）		C3
64−6	〃	東裏		C3
64−7	〃	東加座		G3
64−8	〃	笛川		G4
64−9	〃	内山（町道側溝）		E3
64−10	〃	東裏		C3
64−11	〃	東裏（斎宮小）		C3
64−12	〃	篠林		D2
65−1	〃	塚山		D2
65−2	〃	楽殿		E2
65−3	〃	下園		E2
66	〃	東加座		G2
67	〃	古里		C1
68	〃	古里		C1
69	〃	東加座	20-②	G3
70−1	昭和62	塚山		D2
70−2	〃	楽殿		E2
70−3	〃	木葉山		D4
70−4	〃	広頭		D3
70−5	〃	鈴池		F4
70−6	〃	中垣内		B3
70−7	〃	楽殿		E2
70−8	〃	鈴池（県道拡幅）		F4
70−9	〃	御館・柳原		E3
70−10	〃	西前沖		F2
70−11	〃	鍛冶山		G3
70−12	〃	篠林		D2
70−13	〃	苅干		E1
70−14	〃	中垣内		B3
70−15	〃	西前沖		F2
70−16	〃	篠林・塚山・出在家（歴史の道）		E1・F1
71	〃	古里		C1
72−1	〃	古里		C1
72−2	〃	古里		C1
72−3	〃	古里（塚山1号墳）		B1
72−4	〃	古里（塚山2号墳）		C1
73	〃	西加座		F2
74−1	〃	古里		C1

調査次数	調査年度	調査地字名等	掲載遺物	地図
74−2	昭和62	古里		C1
74−3	〃	古里		C1
74−4	〃	古里		C1
74−5	〃	古里		C1
75	〃	西加座		G2
76−1	昭和63	塚山・古里（歴史の道）		C2・D2
76−2	〃	篠林		D2
76−3	〃	古里（町道排水路）		B1・C1
76−4	〃	東裏		B3
76−5	〃	楽殿		E2
76−6	〃	古里（塚山）		C1
76−7	〃	広頭（斎宮小給食室）		C3
76−8	〃	鍛冶山		F3
76−9	〃	南裏		C4
76−10	〃	古里		C1
76−11	〃	古里（史跡整備）		C1
76−12	〃	楽殿（町下水道）		E1
76−13	〃	篠林		D1
76−14	〃	苅干		E1
76−15	〃	古里・中垣内古里・中垣内		C2
76−16	〃	下園		E2
76−17	〃	鈴池		E4
77	〃	東加座		G3
78	〃	宮ノ前		E3
79	〃	東加座	**13-⑤**	G2
80	〃	西加座	**17-⑨**	F2・G2
81−1	平成元	篠林・塚山・出在家（歴史の道）		E1・F1
81−2	〃	古里ほか（県道拡幅）		C1・2
81−3	〃	木葉山		D4
81−4	〃	楽殿		E1
81−5	〃	中西		F4
81−6	〃	篠林		D1
81−7	〃	中垣内		B3
81−8	〃	古里		C1
81−9	〃	中垣内・東裏（県道拡幅）		B3・C3
81−10	〃	木葉山		D4
81−11	〃	広頭（斎宮小）		D3
81−12	〃	篠林		E2
81−13	〃	塚山（芝生広場）		C2
81−14	〃	楽殿		E2
81−15	〃	楽殿		E2
81−16	〃	東前沖		G1・2
82−1	〃	上園	**57**	D2
82−2	〃	上園		D2
83	〃	西加座	**5-②⑤・22・23・24・54・55**	F3
84−1	〃	西加座	**17-⑦**	F3
84−2	〃	西加座		F3
85−1	平成2	古里（県道拡幅）		C1・D1
85−2	〃	古里		D1
85−3	〃	東裏（町道側溝）		C3
85−4	〃	古里		C1
85−5	〃	楽殿		E2
85−6	〃	西加座		F3
85−7	〃	塚山		C2
85−8	〃	中垣内		A3・B3
86	〃	西加座	**7-⑤・25・26・31・47-④**	F3
87	〃	塚山		D2
88	〃	鍛冶山	**18-④・43-②⑤⑥⑦**	G3
89−1	平成3	内山（斎宮駅舎）		E3
89−2	〃	東加座	**17-⑥・30・46-①**	G3
89−3	平成3	内山（斎宮駅ホーム）		D3
90	〃	西加座	**16・18-⑤・44・58・59・60・61・62・63・64・65**	F3
91	〃	中垣内	**15**	B2
92	〃	鍛冶山		G3
93	〃	内山	73・74	E3
94	〃	御館		E3
95	平成4	内山	**12-⑬・47-⑦・51**	E3
96−1	〃	東加座		G3
96−2	〃	内山（町道側溝）		D3
96−3	〃	古里	**18-⑥**	D1
96−4	〃	中西		F4
96−5	〃	木葉山		D4
96−6	〃	篠林		D2
97	〃	中垣内		B2
98	〃	鍛冶山	**2・12-⑫・35-④・36-②**・45・**47-②**・72-⑤	F3
99	平成5	内山	**48**	E3
100	〃	中垣内		B3
101	〃	塚山・篠林	75	D2
102−1	〃	木葉山		E4
102−2	〃	楽殿		E2
102−3	〃	花園		A3
102−4	〃	東裏		C3
102−5	〃	中垣内		B2
102−6	〃	鍛冶山（町道側溝）		G3
102−7	〃	東裏		C2
102−8	〃	楽殿（町道側溝）		E2
103	平成6	柳原	**12-②**	F3
104	〃	笛川		G4
105	〃	鍛冶山	**3**	F3
106−1	〃	鈴池		E4
106−2	〃	楽殿		E2
106−3	〃	鍛冶山（町道側溝）		F3
106−4	〃	苅干		E1
106−5	〃	鍛冶山		G3
106−6	〃	塚山		C2・D2
107	〃	中垣内	**46-②**	B2・3
108	〃	柳原	**12-④・36-①・39・47-⑥・68**	F3
109	平成7	鍛冶山	**3・6・12-⑨⑩・18-①・67**	F3
110−1	〃	東裏		C4
110−2	平成7	笛川		G4
111−1	〃	内山（A・Bトレンチ）		D3
111−2	〃	上園（C～Eトレンチ）		D3
111−3	〃	宮ノ前・内山（F～Jトレンチ）	**56**	E2・3
112	〃	塚山		C2
113	平成8	広頭	19-①③④⑧・**47-①**	D3
114	〃	柳原	**9・12-⑤**・19-⑤⑥⑦・**32・42・66**	F3
115−1	〃	宮ノ前・上園（Kトレンチ）	**18-③**	E3
115−2	〃	宮ノ前・上園（Lトレンチ）		D3
116−1	〃	塚山（Mトレンチ）	**12-①**	D2
116−2	〃	内山（Nトレンチ）	**4**	D3
116−3	〃	宮ノ前（Oトレンチ）		E2
116−4	〃	上園（Pトレンチ）		D2
116−5	〃	篠林・上園（Qトレンチ）	**12-③**	D2
117−1	〃	楽殿	**13-①**	F2
117−2	〃	篠林		D2
117−3	〃	中垣内（竹川町道）		C2
117−4	〃	牛葉（町道側溝）		D4

調査次数	調査年度	調査地字名等	掲載遺物	地図
117−5	平成8	東前沖		G2
117−6	〃	東裏		C4
118	平成9	内山	**12-⑧・49**	E3
119	〃	鍛冶山		F3
120	〃	西加座	**18-②**	F3
121−1	〃	宮ノ前・篠林		E2
121−2	〃	下園		E2
121−3	〃	御館		E2
121−4	〃	内山		E3
122	〃	鍛冶山		F4
123−1	〃	中西		F4
123−2	〃	中西・笛川(町上水道)		F4・G4
123−3	〃	内山(町道側溝)		D4
123−4	〃	内山(町道側溝)		E3
123−5	〃	楽殿(町道側溝)		F2
123−6	〃	塚山		D2
124	平成10	鍛冶山	**5-③・12-⑪・34**	F3
125−1	〃	塚山		D2
125−2	〃	東浦・牛葉(町上水道)		C4・E4・F4
125−3	〃	篠林		D1
125−4	〃	広頭(町道側溝)		D4
126	〃	中西		G4
127	平成11	上園		D3・E3
128−1	〃	鍛冶山		G4
128−2	〃	斎宮古里		C1
128−3	〃	鈴池(町道排水溝)		F4
128−4	〃	東裏(町道側溝)		C3・4
128−5	〃	御館		E3
128−6	〃	内山(町上水道)		E3
128−7	〃	花園(県道側溝)		A3
128−8	〃	南裏		C4
128−9	〃	内山		D3
128−10	〃	内山		D4
128−11	〃	西前沖		F2
128−12	〃	篠林		E2
128−13	〃	南裏		C4
128−14	〃	苅干		E1
128−15	〃	牛葉		D4
129	〃	御館		E3
130	平成12	西加座	**1・12-⑦・18-⑦・29・50・53**	F2・3
131−1	〃	祓戸		左上枠外図
131−2	〃	東裏(町上水道)		C4
131−3	〃	牛葉		F4
131−4	〃	西加座		F3
131−5	〃	東前沖		G2
131−6	〃	東前沖		G2
131−7	〃	牛葉		D4
131−8	〃	御館		E3
131−9	〃	篠林		E2
131−10	〃	東裏(町道側溝)		C4
132	〃	中垣内		B3
133	平成13	西加座	**5-④・36-⑤・41**	F3
134−1	〃	鈴池		F4
134−2	〃	南裏		C4
134−3	〃	南裏		C4
134−4	〃	内山(仮設水道管)		E3
134−5	〃	牛葉(仮設水道管)		F4
134−6	〃	鍛冶山		G3
134−7	〃	牛葉(仮設水道管)		E4
134−8	〃	内山(仮設水道管)		E3
134−9	〃	塚山		D2
134−10	〃	東前沖		G2
134−11	〃	東裏		B4
134−12	〃	下園		E2
134−13	〃	花園		A3
134−14	〃	笛川		G4
135	〃	宮ノ前	**5-①**	E2・3

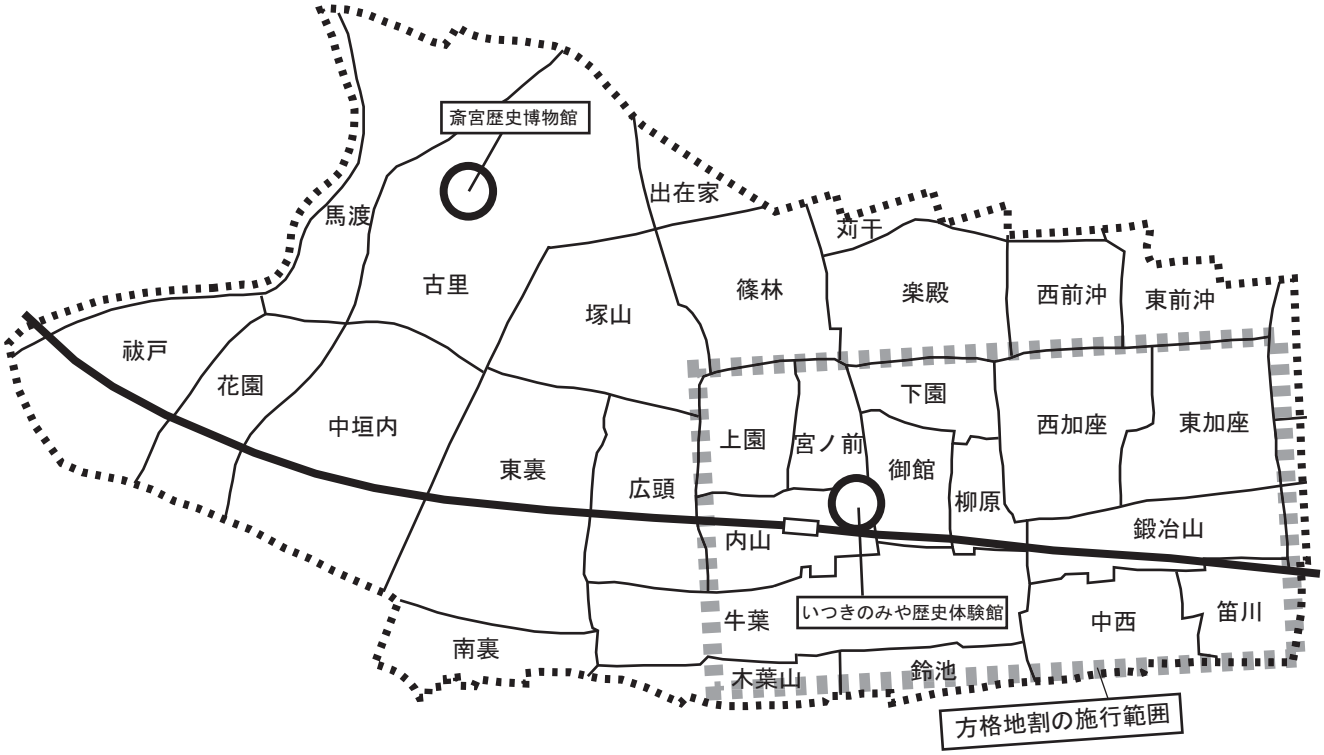
調査次数	調査年度	調査地字名等	掲載遺物	地図
136	平成14	西加座	**52**	F3
137	〃	中垣内	**37**	B2
138−1	〃	鍛冶山		F4
138−2	〃	篠林		D1・2
138−3	〃	中西		F4
138−4	〃	南裏		C4
138−5	〃	東裏		C3・4
138−6	〃	東裏・中垣内(町上水道)		C3
138−7	〃	内山		E3
138−8	〃	南裏		C4
138−9	〃	中西		G4
138−10	〃	南裏		C4
138−11	〃	牛葉		E4
138−12	〃	篠林(町上水道)		D1
138−13	〃	広頭(斎宮小)		C3
138−14	〃	御館		E3
138−15	〃	西前沖		F2
138−16	〃	牛葉		E3
138−17	〃	楽殿		E1
138−18	〃	広頭		D3
138−19	〃	木葉山		E4
138−20	〃	宮ノ前・上園・内山・塚山・中垣内		B2・D2・3・E2
138−21	〃	東裏		C4
138−22	〃	東裏(町上水道)		C3
139	〃	塚山・東裏・広頭	21	C2
140	平成15	西加座	**7-④**	F3
141	〃	中垣内		B2・3
142−1	〃	広頭		D3
142−2	〃	牛葉(町上水道)		D4
142−3	〃	南裏		C4
142−4	〃	出在家		D1
142−5	〃	西前沖		F2
142−6	〃	中西		F4
142−7	〃	東裏		C4
142−8	〃	下園		E2
142−9	〃	牛葉		D4
142−10	〃	牛葉		E4
142−11	〃	楽殿		E2
142−12	〃	内山		E3
142−13	〃	西加座		F3
142−14	〃	牛葉		E4
142−15	〃	楽殿		E1
142−16	〃	古里		C1
142−17	〃	中垣内		B3
142−18	〃	中西		G4
142−19	〃	牛葉		D4
143	平成15	柳原	**7-⑥**・20-①	F3
144	〃	中垣内		B3
145−1	平成16	古里		C1
145−2	〃	楽殿		E1
145−3	〃	牛葉		D4
145−4	〃	牛葉		E4
145−5	〃	中垣内		B3
145−6	〃	東前沖(町下水道)		G1・2
145−7	〃	東前沖・西前沖(町下水道)		F1・2・G1
145−8	〃	牛葉		E4
145−9	〃	中西		G4
145−10	〃	東裏		C4
145−11	〃	中西		F4
145−12	〃	東裏		B3
145−13	〃	東裏		C4
145−14	〃	中西		F4
145−15	〃	塚山		D2
145−16	〃	西前沖		F2
145−17	〃	斎宮古里		C1
145−18	〃	西加座		F3

調査次数	調査年度	調査地字名等	掲載遺物	地図
145−19	平成16	東前沖		G2
145−20	〃	下園		E2
145−21	〃	祓戸(側溝)		左上枠外図
145−22	〃	鈴池		E4
145−23	〃	西前沖		F2
145−24	〃	東前沖		G2
146	平成17	中垣内		B3
147−1	〃	出在家		E1
147−2	〃	牛葉		F4
147−3	〃	牛葉・木葉山(町上水道)		D4・E4
147−4	〃	牛葉・鈴池・中西(町上水道)		E4・F4
147−5	〃	鍛冶山・中西(町上水道)		F4
147−6	〃	篠林・苅干・楽殿(町下水道)		E1・2
147−7	〃	楽殿		E2
147−8	〃	出在家		D1
147−9	〃	楽殿(町下水道)		D1・F2
147−10	〃	祓戸(側溝)		左上枠外図
147−11	〃	東前沖(史跡整備工事)		F2・G2
147−12	〃	笛川		G4
147−13	〃	牛葉		E4
147−14	〃	牛葉		E4
148	〃	西加座		F3
149	平成18	中垣内		B3
150	〃	東加座		G3
151−1	〃	東加座(町下水道)		G2
151−2	〃	篠林・楽殿・出在家・古里2(町下水道)		D1・E2
151−3	〃	牛葉		D4
151−4	〃	篠林		D1
151−5	〃	東裏		C3
151−6	〃	南裏		B4
151−7	〃	東前沖(町下水道)		G2
151−8	〃	笛川・中西(町上水道)		G4
151−9	〃	牛葉		D4
151−10	〃	東加座		G3
151−11	〃	木葉山		E4
151−12	〃	牛葉		F4
152	平成19	柳原		F3
153	〃	柳原	72-⑧	F3
154	〃	広頭	17-⑧	D2
155−1	〃	出在家		D1
155−2	〃	木葉山		D4
155−3	〃	中西		G4
155−4	〃	中垣内		B3
155−5	〃	牛葉		E4
155−6	〃	牛葉		E4
155−7	〃	鍛冶山(町下水道)		G3
155−8	〃	東裏		C4
155−9	〃	東加座		G2
155−10	〃	牛葉		E4
155−11	〃	牛葉		E4
155−12	〃	古里		C1
156	〃	西加座		F3
157	平成20	柳原		F3
158	〃	御館		E3
159	〃	西加座		F3
160	〃	東加座		G2
161−1	〃	楽殿		E2
161−2	〃	西加座・西前沖・鍛冶山(町下水道)		F2
161−3	〃	牛葉		C4
161−4	〃	西加座		F2
161−5	〃	牛葉		E4
161−6	〃	牛葉		E4
162−1	平成21	西加座・西前沖(町下水道)		−
162−2	平成21	古里		−
162−3	〃	下園・楽殿		−
162−4	〃	楽殿		−
162−5	〃	東裏		−
163	〃	柳原		−
164	〃	御館		−
165	〃	柳原		−

※　写真掲載遺物の数字は巻頭の写真図版の番号に対応する。

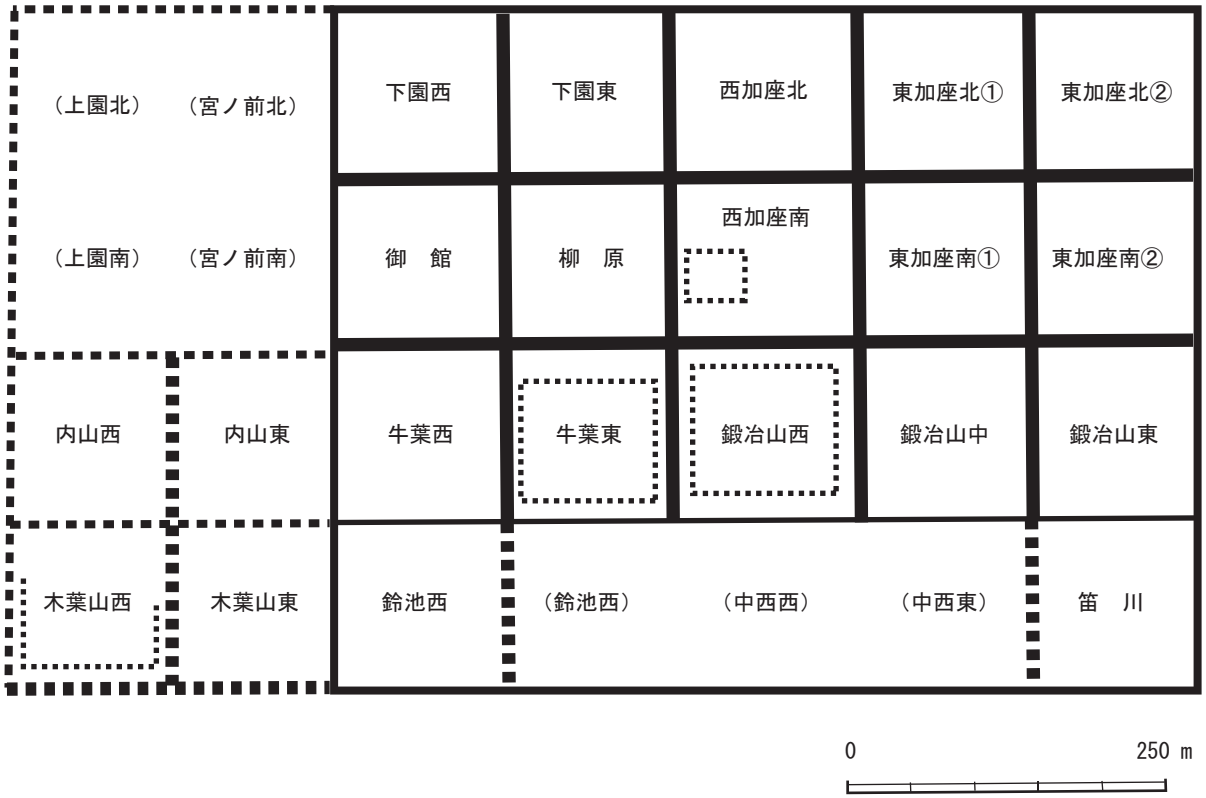
※　写真掲載遺物の数字が太字のものは重要文化財。

※　地図の番号は巻末の調査区位置図の方眼に対応する。



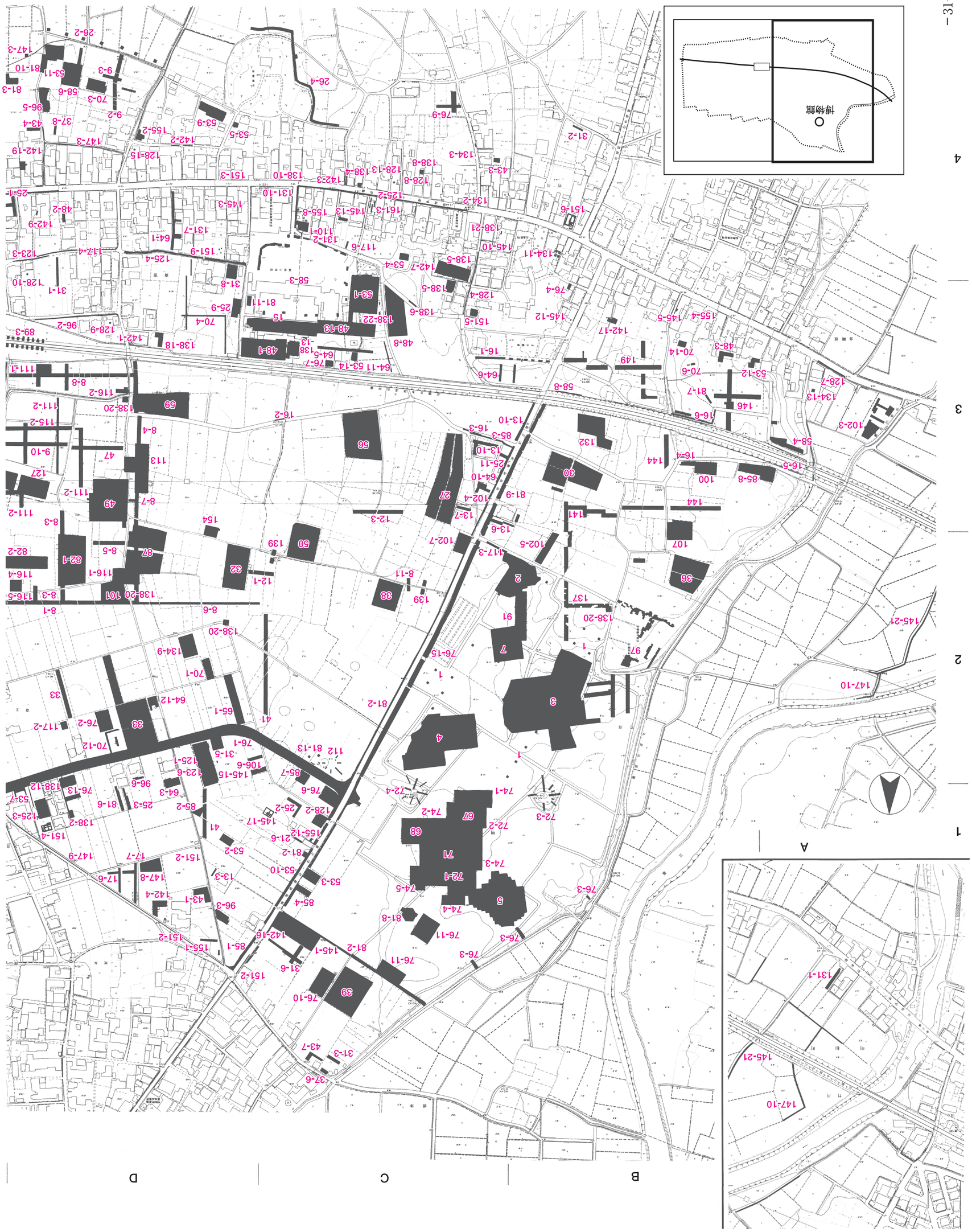
史跡斎宮跡内の小字名

0　500m



斎宮跡方格地割内の区画名称

区画内の太い破線は区画道路の想定ラインを、細かい破線は板塀による区画をあらわす



史跡斎宮跡発掘調査地位置図（史跡西半）

史跡斎宮跡発掘調査地位置図（史跡東半）

斎宮跡発掘資料選 Ⅱ

平成22年3月26日

編集発行　斎宮歴史博物館
三重県多気郡明和町竹川503
印　　刷　伊藤印刷株式会社